或は虚榮を戒め、或は過去は神の現在なることを語り、或は他の吾を感じ、或は自然との活ける交通を希ひ、而して眞神に對する活ける信仰を望みたり。シンセリティなる事をつとめたり。

今や如何。今や如何。

天地、人生の話、これ吾をして凡てを感得せしむる警句なり。而して歴史、人物、自然、人心の不思議の更らに不思議ならんことを希ひき。然れども吾が地位の社會水平線に上ほるに從つて次第に此の熱誠はさめんとはするに非ざるか。

一言す。

ウォーズウォルスの語をかりて一言す。曰く、希望の食物は沈思の働きなりと。而して吾はこの沈思を缺きつゝある也。吾が境遇は次第にこの「沈思」を奪ひつゝある也。

吾は境遇の奴隷たる也。冷靜は吾を救ふ可きに、却て吾に此の冷靜を缺く。

吾道行きを知れり。如何なればわれ更らにシンセリティたるを得るや。如何にすれば吾今夢の如く望む神聖自由の地に達し得るかの道行は、吾これを知れり。

吾實に一歩、一歩、行かんとぞ思ふ。切に思ふ、一歩、一歩、然りたゞ夫れ一歩、一歩。

然れど吾常に躓くのみ。躓きては徒らに激昂するのみ。

嗚呼たゞ一歩、吾はたゞ一歩の確實堅固ならんことを希ふ。

二十七日。

嗚呼狹溢にして窮屈なる哉、人間の思想、感情、想像の天地や。吾日々何を思ひ何を感じ何を想ふぞ。今日の吾は昨日の吾に非ずや。

日々夜々、空々漠々たる頭腦の車輪は回轉しつゝあるなり。道行も定まれり。幅員も廣狹も長短も明らかなり。新鮮濶大の天地の變化少しもなきなり。

人たれか倦まざらんや。

除夜の記

三十一日。明治三十七年も已に逝きたるか。新年は來れり。年齢また一つを加ふ。一年また一年、吾も已に壯年に達したり。この一個獨立の靈の命運は如何。

吾が前に吾なく、吾が後に吾なし。われ星の如く宇宙に立つ。知らず吾が存在の意味は如何。

神聖なる宇宙、不思議なる人生！　吾をして歳月と共に愈々此の神聖と不思議とを直感せしめよ。

吾が願はこれなり。

明かに言へば吾今進歩なし。

明かに言へば吾シンセリティの度に於て退却せるを覺ゆるなり。

これ戰慄す可き退却なり。何となればこれ自滅なればなり、シンセリティの度は退却する時に於て一歩、三歩、七歩の恐ろしき比例を以て退却するものなり。

見聞遭遇する處のもの、若し或は吾がシンセリティを殺すの利器とならんか、吾が歳月は吾が自滅の道行と言ふ可し。

われ人と語りて其のシンセリティならざる心靈の痲痺に戰慄す。人間何者か不シンセリティなる程恐る可き事やある。かれは自殺の人なり。吾が存在の不思議を直感し能はざるに至らば吾が靈已に痲痺したるなり。

嗚呼われ祈念を神にこらさん。

二十八年正月十四日。

吾は孤獨のうちに神と親しむの經驗を有せざる也。獨立獨行と寛容自適とを包擁せしむるもの、實に此の貴き經驗のうちに生ぜざる可からず。「神に對するの義務」てふ絶大の德もまた茲に發す。

區々の憤激を止めよ。爾は此の經驗に缺乏する者なり。

社會は時々刻々吾を奴隷となさんとす。吾が心は神を望み、神と親しみ、神の愛による事をつとめずして吾が眼は社會の我が儘の權勢を仰ぎ見んとはする也。

吾が薄弱は内より吾を陷いれんとし、吾が周圍は外より吾を奴隷となさんとつとむ。

薄弱に對しては悔恨的痛苦あり。周圍に對しては冷笑的反抗の苦闘あり。此の不可思議なる宇宙に吾が心魂は狂はんとする也。

十五日。

昨夜は士官次室に於て山路少尉と衝突したり。山路は飽くまで吾を嘲罵したり。しかれども彼は酒を被り居たり。かれは自家の淺薄なるを知らざる也。彼は一種の好漢なれども要するに才子に似たる愚物なり。士官次室に於て其の人物を推せば野村少尉を第一となす。其の次は藤本少尉なり。

何故に山路は吾を罵りたるか。嗚呼山路と言ふ勿れ。吾を知らざる者、徒らに吾に向つて吠ゆ。

萬犬をして虚を吠えしめよ。

水兵は吾を高慢なるやつと思ひ居る也。高慢なる水兵よ。

吾威海衛攻撃の後は一と先づ歸京せんかと思ひたり。然れども、吾は尙ほ何時までも、社より歸れの報のなき限りは何時までも艦上に留まるべし。

外、水兵及び士官をして正當に吾を解せしめ、内には自家無限の苦悶を此の世外波上の別天地に放任せんことを欲す。

否な否な、吾はたゞ吾が品性の上達を希ふ。此の故に艦上の狹苦るしき遲鈍なる生活を以て吾を鍛錬せんことを欲す。

嗚呼齷齪として自から小にす。天地の無限窮りなきを知らざるか。

大なる文章は大なる品性なり。大なる詩は大なる信仰なり。而して大なる經驗は大なる品性と大なる信仰を養ふ。

目下の吾が心の不穩を靜めんが爲めに、吾が過去快心の事を誌して左にならべ、暫らく「過去」てふ懐かしき故郷の女神と遊ばんと欲す。

吾が尙ほ丁年に達せざる十八九歳の頃、長門舟木の驛に、暫らく父母弟と共に住みし事は、吾が知る所なり。忘るゝ能はざる所なり。

弟と共に、家を出でゝ丘山に逍々奔馳し、咲き亂れたるきゝやうを集めたる事あり。瞑目して回想し來れば、吾も弟も浮世の者に非らざりけり。

弟及び一少年と共に數里を遠行して釣を垂れしことあり。小川の淸洌なる流れ、今猶ほ眼前に在り。歸路淋しき谷底にて驟雨に遇ひぬ。白き雨、頭上の青山を壓して來り、寂寥の感に打たれぬ。白雨青山今猶ほ眼裏に存す。

彼の山、彼の水いま依然たるべし。彼の少年の運命は如何。

吾が家を後門に出でゝ、溪流に沿ひ、谷を上ぼり行けば、兩山の相合はんとする谷間に池あり。弟と共に薄暮此の邊に來りて無心寂々たる水面に對し、時に波紋の起るを見て、如何なる魚や住むとのぞき込みし事もあり。

岩國の時代を回顧すれば夢の心地す。

父と共に秋の小春時、近山を漫歩して小松を引きし事あり。父上も尙ほ壯んなりき。今は老い朽ちぬ。吾は十一二歳の少年なりき。

無心の自由魂なりき。今は世の重荷に苦しむ。

樋口左文今は如何、嗚呼竹馬の友よ。君が池の金魚は如何に羨ましかりしよ。君が机上の源平盛衰記の書は何十度ひもとかれしよ。君と共に野に出でゝ、小鳥を欺かんと試みしこと、吾忘る能はず。いせが岡の郊野は吾が夢想にぞある。

吾が初戀の少女今は如何。

若し夫れ佐伯、或は麻郷村の「自然」に近き生活を思ひ起すも、此の時代也。自由魂は已に半面苦悶の影を挿へたり。回想の快事は無心にあり。

二十二日。

昨日内村鑑三氏の流竄録を讀んで、突然一つの恐ろしき決心吾が胸間に浮び出でたり。吾此の決心と共に無限の憤慨を感じ熱涙をのみたり。

十九日、大連灣を發して榮城灣に向ふ。二十日午前六時榮城灣到着。陸兵上陸をはじむ。

降雪紛々、山岳ましろなり。北風烈し。

二十一日、(昨日)本隊及び第一第二の遊擊隊威海衞の前に示威運動を行ひ砲擊を受けたり。

本日正午榮城灣へ歸り碇泊。

天氣晴朗氣候溫暖。

莫國艦隊來る。

敵艦依然威海衞に在り。

此のごろ少しく用ひそめたる酒と煙草とを嚴止せり。

二十七日。

榮城灣に在りて此の筆をとる。

一昨二十五日通信文を國に送りたり。

明日威海衞の沖に漂泊して警戒せよとの旅命ありたり。

榮城灣に於ける陸兵の上陸は已に了はりたる樣子なり。

支那艦隊の運命は已に迫まりつゝある也。

英國軍艦は常に一二艘づゝ桑城灣に碇泊し居るなり。日本國、前送の希望と共に經營すべき事多し。

一度近づかんとしたる自然、今や日々に遠ざかりゆく也。一度び燃えんとしたる信仰今や日に零落しゆく也。

有望なりし此の一個の青年は、將に俗界に俗了し盡さんとはする也。かれの高潔なりし感情も日に冷却せんとはする也。

はかなきは人心なる哉。

人間肉體のもろきを嘆ずる勿れ、人間靈性の更らにもろきに驚く。

自然、人間、人生、に就て嘗て燃やしたる驚異心は今や水平線下に沒し去りたるの感あり。

靜かに一室に歸りて默座沈思し、日々の吾を反省し來る時は、眼に映じ來るたゞ一個、無邪氣なると共に無學無信にして自重自信なき少年を。

かれが熱情昂揚し來りて、神明に祈禱する時に如何に獨立自由自信にして高潔なる男子の如きよ。

されどこは其の時のみ。

彼に、宇宙の不思議と人生の眞面目とが忘却せらるゝ時に於て、神に對する義務の決心が忘却せらるゝ時に於て、汝は一個の俗物のみ。

二月

五日。

欺かざるの記を記しはじめて以來已に二箇年を全うせり。

碌々たる吾は、依然として碌々たり。狂氣じみたる吾は依然として狂氣じみたり。信仰なき吾は依然として信仰なき也。日月轉ずれども吾たゞ老ゆるのみ。精神の進歩に於て一も見る可きあらず。

人生は暗黑なり。人間は薄弱なり。

吾は「薄弱」の種を播いて「絕望」を刈りつゝあるなり。

されど吾、吾如何に墮落し、如何に失望すと雖も、希くは僞善者となり、世俗人となりて、吾が

獨立不羈の心靈を沒了する勿れ。

薄弱の惡鬼よ、來りて吾を殺せ。「瘧痺」の妖怪よ、來りて吾を捕へよ。されどされど、吾斷じて世と人とに盲從せじ。飢餓とひんせきと吾を咀ふと雖も、吾斷じて吾が自由を失はじと誓ふ。絕海の孤島に埋もれんことを希ふ。而して吾が自由を全うせん。斷じて日本國東京の榮華を夢みじ。

見よ。吾が踏まざる世界は廣し。吾と同じき人間の仕所は到る所に在り。

南米の森林、北米の原野、到る處吾が短かき〳〵五十年を送るに足る。

吾に一個の自由なる心靈を與へよ。然らば吾は足る。

救世！　愚人の夢のみ。人須からく自由に我が儘に勝手に生活すべし。

花、月、雪、山、水、悉く我が心靈の自然の友ならぬはなきなり。

愛！　まゝよ。變愛のはかなき夢に迷はゞ迷へ。

戀愛に死なば幽冥に生きん。

此の一個の青年、其の流るゝ　まかさしめて春の水の運命に等しからしめよ。一個此の吾、何物か一指を加ふることをよくせんや。

されど凡てこれ狂者の言か。

吾が爲しかけたる事にして爲しとげられたる事は十の中、一二もあらざるべし。浮薄なる慣習は實着熱心にして冷却せざる實行の成功に適せず。

嗚呼區々愚痴の言を止めよ。自暴自棄の愚者默せよ。小我の狂暴者よ、默せよ。

見よ、見よ、自然は依然として自然なり。無限壯大なる宇宙は少しも其の壯重偉大の象を失はざるなり。

爾の眼を此の神秘なる自然に轉ぜよ。此の不思議にして神聖なる自然に轉ぜよ。吾が耳を人情自然の音に傾けよ。

嗚呼無名にして無限、偉靈莊重なる自然大宇宙よ。吾玆に立つ。

人生！　此の不思議なる世界に於ける此の不思議なる人生！　爾は其の幽玄不思議を思ひて敬虔の念と共に一種の恐怖の念は起らざるか。

眞理、眞理、不思議にして神秘なれども、宇宙の生命なる眞理。

愛なる神よ。眞理と善德と愛情と美麗とを立て給ひし神よ。永遠の生命を立て給ひし神よ。

嗚呼强かれ、信仰に由りて强かれ。

「なんぢら目を醒し、堅く信仰に立つて、丈夫の如く剛かれ」

人生は現實なり。眞面目なり。宇宙は全體なり。神は不朽永遠の主宰者なり。人間の行爲は不磨の事實なり。「勞作」は人間が「永遠(エターニティ)」にきざむべき「義務」なり。煙と雖も消えず。宇宙に消ゆるものなし。靈界の法則とても然り。

著作者の書籍は朽ちん。ゲーテのファウストもシエークスピアのハムレツトもウオーズウオルスの詩集もカーライルの著書も、朽ちはつるの時は來らん。其の名は丘山の收童の名の如く、早かれ晩かれ忘れはてられなん。

永久の時間、人間は物質に於て、凡ての死を見る。されど心靈！ 永遠(エターニティ)は「今」のうちに在り。神聖なる法則は時間と空間とに經緯せられざる也。

六日。

威海衞の攻擊も已に了らんとせり。敵の定遠、威遠、來遠、外一艘は一昨夜、及び昨夜を以て吾が水雷艇のために破壞せられたりと旗艦は報告せり。

吾が千代田は本日本隊より獨立して威海衞東口を斥候したり。本隊は蔭山口に碇泊したり。支那の艦隊餘す處幾何もあらずなりぬ。降るに非らずんば全滅する事遠きにあらざる可し。

薄暮甲板に立ちて望めば、天晴れて月色淸く、西天なほあかねをのこし、明星兩三點、百尺竿頭にかゞやき、海波茫々として北天遠し。宇宙はたしかに美也。

十六日。

夜十時四十分此の筆をとる。

士官室の暖爐の前の椅子に座して吾獨り在り。

明十七日は愈々支那の殘艦を受取る可き日なり。支那北洋艦隊全滅の日なり。

支那軍艦廣丙は吾が千代田艦々員が捕獲すべき配置となる。而して其の配置に當る者は臼井二分隊長司令となり、野村勉少尉等之に屬す。

かれとは何ぞ、われとは何ぞ。

此の吾を憂ひ、此の吾を思ふの心靈は、彼の吾を憂ひ彼の吾を思ふ能はざるか。

二十四日。

十七日を以て威海衞港内に入りたり。

夢の如くにして一週間を經たり。

昨日二十三日西京丸にて祝勝の大宴會開かれたり。

一昨夜二十二日の夜野村勉少尉の歴史を聞きたり。

吾が現今及將來は暗黑なり。

人間が此の世界に於て各々受く可き運命を思ふて止まず。

所謂る「官」なる者の消息を解したり。「社會」と「官」との關係を解したり。「個人」と「官」との關係を解したり。

三　月

三日。

今對馬竹敷に碇泊す。一日午後入港したる也。威海衞を發したるは二月二十六日午前十時也。

途中風强く浪荒らく、廣丙のために遂に玆に立寄りたる也。

到着の日直ちに嚴原（いつがはら）に到り電報を打ち、其の夜は一泊して昨日正午本艦に歸り、

直ちに水交社倶樂部に至る。これ當地海軍將校諸子より千代田廣丙士官一同を招待したる也。

横田大尉に導かれて水雷布設部を一見したり。

薄暮、倶樂部にて牛肉を煮て食ふ。直ちに中山大尉の招待に二少女の踏舞を見物し、夜十時歸艦す。

忘るゝ能はざる者は、

對馬の風景、小馬、九歳の舞踏少女、更らに詳記せんと思ふ。

吾は如何なる事ありとも吾が存在を自己自から賤めすつべからず。

吾、必ず勝たざる可らず。世！　世を支配せよ。如何なることありとも「同等なる人間」の世界

をして吾に勝たしむ可からず。

九日。

五日に吳港に歸る。其の日直ちに退艦して廣島に歸る。廣島は大手町四丁目福井方本社特派員の宿所なり。玆には德富猪一郎氏平田久氏横澤三次郎氏茂木啓次郎氏塚越運八氏等ありたり。塚越君は六日出發從軍す。これを宇品に送りぬ。昨日（八日）茂木君を吳港まで送り軍艦嚴島に乘らしめて今日午前廣島に歸る。

今日河村正雄氏來り訪ふ。

十四日。

東京麴町區平河町五丁目一番地なる現住所に於てこれを認む。

三月十九日。

夜十時靜座默思此の筆をとる。

周圍の感化を逸脫して獨立獨歩の天地に入らざる可からざることを感ずる益々切なり。

平凡なる周圍は吾をして情と想と共に平凡ならしむ。

吾が今日の周圍は日本今日の普通なる社會に比して數等優れたるに相違なし。されど鬱勃たる吾を滿足せしめざる也。

紛々たる政治世界は吾をして力を玆に致し大に人民のために爲さんと欲するの情を高めしむ。

されど吾が心から希望する處は、天よりのインスピレーションなり。深遠なる學識なり。消えざる火の如き信仰なり。

冷やかに言へば吾に信仰あるなし。吾に確信あることなし。吾に絕對の眞理と善德と美妙とに對する確信あることなし。

吾に全能全智聖愛なる天父の現存する信なし。

吾が目前にはたゞ紛々たる世間現存するのみ。

吾が心にはたゞ此の目前の世間が映ずるのみ。

已に信仰なし。故に義務に對する勇氣も自任も忍耐もあることなし。されど吾決して自暴自棄せざることを期す。何となれば吾遂に信仰を得べければ也。吾遂に發達進歩到着せざれば廢せざれば也。

吾、決して人生と自然との不思議を無感覺に措く能はざる也。

人生は確かに不思議なり。吾は人間なり。此の不思議に對して獨立獨歩の默契者なり。吾は人間なり。吾は吾の最初最後なり。此の吾が生は吾の全體なり。吾に古人なし、吾に來昔なし。故に吾は自然の兒なり。故に人生の不思議は吾に最初最後の事實なり。吾、眞面目に信仰を求めざる可からず。

二十日、

吾が知る人、知らざる人、道に出逢ふ人、共に語り共に爲す人、彼の人も此の人も、愛慕に堪へざる人も、憎く思ふ人も、凡ての現在接着する人悉く死す可きを思へば不思議なる哉。愛と死と、撞着する如くにして兩立和合するが如くに感ず。彼の人も吾も共に何時かは死の關門の奥の世界に屬す可き者なることを思へば、吾が彼の人に對する情は更らに眞面目に赴くなり。

藤形死すとの事實を今夜父母より聞き、吾が心はいたく動きぬ。其の妻の貧困窮迫なるを思ひ、其の周圍世間の刻薄なりしを聞くに及びては、實に神のみ知り給ふ不遇の如何に多かる可きと。

二十五日。

朝記す。

昨日は日曜日、われ當直。終日國民新聞社樓上に在り。李鴻章狙擊の飛電馬關より來る。號外發兌の爲め夜十一時漸く退社、十二時歸宅す。李已に傷つく、今後の形勢果して如何。李にして男子ならば此の事を口實の一端に置き政略の一助となすの卑劣行爲を試みざるべし。されどかれは窮鼠なり。

四　月

五日。

二十五日より五日に至るまで日本の歴史より言ふも實に多事なる日なりし也。

されど余は今日始めて「困難」に對する「打ち勝ち」の快感を感じ得たり。余は「困難」なる文字を嘲笑するの一種言ふ可からざる快事なるを感じたり。

已に一度かく感ず。世に最早や「困難」と云ふ程の事、則ち吾が爲さんと欲して困み艱むが如き事の消滅したるが如くに感ずる也。

八日。

昨日は日曜日、

櫻花已に咲き亂れたり。吾が庭前の桃は已に散りそめたり。今朝の春雨、花のためには敵なり。

昨日大久保、永谷の二氏と共に金子馬治氏を市ヶ谷に訪ひぬ。昨夜は一番町教會に於て乘艦の談話をなしたり。

昨日、中島貞子孃より書狀來りたり。これ吾が兩日前通信したる返事なり。余と此の孃々の交際はこれより始まらんとす。余は此の交際を實に樂しく、またうれしく思ふ也。

閲讀書　（昨日）

福音新報、三百十號。――基督敎徒の德（三）有神新論。

余が情念を高上ならしめよ。諸々の疑念、憂苦、區々のなやみの上に在らしめよ。

余は神に賴りて自由ならざる可からず。愛と美と、これ余を救ふ神の力にぞある。

十日。

嗚呼諸々の人々の生涯、同情に堪へざる也。

吾が日本に於ける幾多の人々、爾は山林に生れて山林に死したるならん。爾は陋巷に生れて陋巷

に死したるならん。嗚呼同情に堪ふ可けんや、諸々の人々の生涯。

天の下、地の上に於ける諸々の爾等。其の一生の命運、境遇、出來事、それ如何。

荒れたる情に任かす可からず。

深く觀察せよ、靜かに修養せよ。

爾のシンセリテイを養へ、耕せ、培へ。

恐るゝ勿れ、憚かるなかれ、惑ふ勿れ。

小我に苦しむなれ、博愛の自由に入れ、上帝の愛を思へ、たゞ上帝に依賴せよ。

博く人生を思へ。

中島貞子孃に書狀を發す。家庭雜誌を送る。昨朝母上銚子に歸省せらる。これを小網町河岸に送る。收二と共に直ちに上野公園の櫻花を見る。

出社して、午後三時に及び退社。歸路、嵯峨のや君の宅を訪ふ。露西亞文學を語りぬ。

一昨日は出社せざりき。

夜、靖國神社にて校正す。歸路、大久保君の宅に行き、兼ねて氏より聞き置きたる井伊家公子教育の事を諾し、氏の推舉を賴みたり。何故に新聞社を退きて此の退隱的生活をえらびたるか。曰く、世に暫時分離して讀書生とならんがためなり。

我が詩人たる可き使命は已に決したり。嗚呼如何に高潔にして自由なるか、詩人の職。

讀書錄。

シルレルのウイルヘルム、テル、國民之友、家庭雜誌、有神新論。

十二日。

昨日の夜、大久保氏を訪ふ。金子馬治氏あり。三人共に語る。金子氏より、氏の友なる某青年の自殺せし事を聞きたり。

本日午後今井君と共に向島の櫻花を見る。

吾が希ふ處は獨立の生活なり。自由の生活なり。われ實に農夫の生活を取りたくなれり。言ひ換ふれば山林田園の生活を送りたくなれり。されど決して自から高うし自から淸うして、自から世とはなれたる平安をのみ願ふに非ず。

余が知り、學び、思はんことを願ふものは、

自然及び人間の事實なり、眞理なり。人の美なる想なり、信仰なり。言ひ換ふれば自然及び人なり。

十三日。

午前八時前、家を出でゝ麻布區霞町なる竹越與三郎氏を訪ふ。其の用事は國民の友編輯の事なり。

中村修一氏入牢したるため、われ其のあとを受けて國民之友編輯者となりたればなり。與三郎氏不在、出社ときゝ直ちに出社して相談を遂げ事務を引きつぐ。

夜、富永德磨氏來訪談話。

中島サダ子孃より來狀。

吾より直ちに絕交狀を送る。そは彼の女の書狀中、共に同情の人と思ひて交はりたしとの句ありたれば也。

彼の女が此の書狀たるや、吾が温かき情を忽然冷却せしめたり。

彼の女は思ひしよりも多感眞摯ならず、到底世間通俗の一女たるを免かれずと見えたり。

嗚呼高潔多感、多情、眞摯、無邪氣にして且つ同情に富み、學と文とを兼ねて、戀愛の幽邃、哀深、悲壯にして春月の如き消息を解する女性何處にあるか。

十七日。

媾和談判成りたりとの報あり。

國民之友の編輯を昨日よりはじむ。

昨日の大久保氏の話ぶりにては公子教導の一件は不成功なるが如し。一昨日午後、山路、宮崎の二氏及び收二と共に散步を試み、薄暮宮崎君の宅にて牛肉を煮て食ひ、快談十時に及びぬ。

直往前進、大に實際界に戰ふ可きかとも思ひ、または詩人たる素思を行ふの便宜をとることを計らんかとも思ふ。

詩人豫言者の爲す處は敎ふるにあり。されど英明、德實、高尙、偉大なる爲政家は余の理想なり。

十字架のクリストを思はゞ、凡ての事献身的ならざらんと欲すと雖も得ず。

文章を以て立つと、行爲を以て立つとに論なく吾が終生益々シンセリテイなるを得ば可なり。

一生五十年已に半ばを過ぐ。起て、爲せ、醒めよ。

人生は眞面目なるぞ。

爾は宇宙に生ける永久の靈なるぞ。

天の星なるぞ。

○十字架上のイエス。

嗚呼イエスキリスト、君は千八百九十五年の昔には此の世に吾と等しく肉を持ちて空氣を呼吸せられしなり。

今やわれ如何に君を此の地上に見んと欲すと雖も得ず。

されど君が嘗て地上に居たまひしは事實なり。

十字架に懸けられしも事實なり。

君が人間の罪惡を救はんが爲めに、一生をさゝげ給ひしも事實なり。これ詩人の作り事にあらず、吾等の妄想の一隅に存する事にあらずして、此の天地間に實現したる事實なり。

吾もまた此の生を此の天地間に享けて今已に二十五歳の日月を費したり。
天地てふ不可思議なる連續の間に君と吾とは現はれたり。
此の事實に眞面目に對する時に於て、吾は人間の愛、人間の義務を感ず。

二十三日。

朝まだきより春さめそぼふりはじめぬ。
二十日の夜より發熱したる風邪、今朝は大にこゝろよし。されど未だ全くはぬけず。
伴武雄氏より一片のはがき來り氏のほそ〴〵たる息のねのうちにこもる炎々たる青年の熱情をもらして筆底涙あり。吾をして泣かざるを得ざらしむ。これは數日前の事なり。昨日われ一書を出し置きぬ。
金子馬治氏、吉見チェ氏、石崎松兵衞氏に音信す。

庭の若葉、雨に濕ひ、雫滴りて玉をなす。

二十四日。

此の吾が身が宇宙不可思議の理法に驅られつゝあるを思ふ時は悚然たらずんばあらず。

二十九日　月曜日。

昨日父及び收二と共に大久保村につゝじを觀にゆき、郊野を散歩して歸る。

露國干渉は愈々事實となりぬ。人心これが爲めに激昂せるが如し。國家の前途愈々多事ならんとはする也。

國民新聞に掲載せんと欲し、山林の友に與ふるの書を書きつゝあり。

五　月

一日。

本郷なる大學病院に並河平吉氏を見舞ひて今歸宅す、夜十時なり。
富永德磨氏を同伴せり。

富永氏と行く〳〵人生の不可思議を語りぬ。

並河氏は脚氣病なり。枕頭に在りて暫時ものがたりぬ。
富永氏の家庭の不幸をきく。

シルレルのウイルヘルム・テルを讀みつゝあり。

所感多し。
露國との形勢迫れるが如し。若し破裂して一大決戰を惹起し來らんか、實に世界上史の一大變動たらずんばあらず。

かれを思ひ、これを思ふ、實に所感多し。
此の世界、人間の世界は不思議なる哉。
幻影の如き哉。

六日。
昨日は日曜日、午前十時、會堂に出席し植村正久氏の演說をきゝ午後二時より富士見小學校同窓

會なるものに出席して艦隊從軍の談話をなしたり。

今日午後出社す。當直なり。
平田久氏と共に氏の下宿にゆき、晩食す。
薄暮下宿屋を出で、再び民友社に至り雜談の後銀座街頭を散步して平田氏に別れ、歸宅すれば十時なり。

吾は必ず非常なる進步を今後兩三年のうちに見る可しと信ず。
兎に角に感慨多し、激昂する也。
已に二十五歲！ 泣きたくなるなり。碌々たる一書生！ 恥づ可き哉。されど吾は吾を信ず。
天地、人生、社會、人間、是等のものは新らしき光もて照らされんことを吾に待つなり。

國家多難なるが故に實際的活動を吾頻りに望めども、また一方を顧みて詩人の職を重んず。斷乎、われ詩人たる可きのみ。

冷遇せらるゝとも關する處に非ず。自家の本領は自家これを信ずるの外なし。

七日。

所感あり、左に錄す。

人の尤も戒嚴す可き時は則ち世に立ちたる時にあり。言ひ換ふれば讀書生として理思界をのみ瞻仰し年少清爽の意氣に充ちあふれたる時より、實際社會に突入して世の風潮に浸染せらる可き時に遷りたる間際に在り。

反省するも此の時なり。

戰ふも此の時なり。

健全なる發達の長途に上ほるも此の時なり。學ぶ可きも此の時なり。然るに滔々たる青年を見るに殆んど此の時に直に社會水平線のうちに沒入し始むるなり。今井を見よ、田村を見よ、其の他社中の人々を見よ。たゞ吾は斷じて然らざる可きを誓ふ。

斷言し且つ自信す。吾はこれよりして始めて大成の途に上ほるべきなり。

故に如何なる社會的困厄をもあへて辭せざるべし。

如何なる試驗をもあへてさけざる可し。

戰爭！　戰爭！　吾は戰爭を歡迎せん。

苦戰を歡迎せん。討死すらも辭せじ。

自由なる自然の兒！　何を齷齪たる可き！　人間將に自由なる可し。

自由なる精神を鼓舞して行くに於てまた何の沒落ある可き。

然るに一度び彼の今井氏の如き田村氏の如き水谷氏の如きを思ふ時は、默々たる人生の悲戲此の上もなきを見る。

水谷はコンモンセンスを缺きたり。今井・田村は俗界に陷いりたり。

彼等は始めより不完全にてありし乎。或は然らん。されど兎に角に年少なる讀書生としては彼等は世の普通の青年と異なりし也。

今や、月日の轉ずると共に、波瀾なき悲戲、墓中の悲戲とも言ふ可きは彼等の運命なるを見るなり。

山路愛山は、英靈なる青年の夭死を哭したり。されど、人若し泣く可くんば默々として世の波に洗はれつゝある青年の身の上を泣く可し。一度び友の爲めに哭し、一度び自家激勵して玆に所感を誌し置く。

十二日　日曜日。

國民之友未だ發行解停にならざるが故に社務は至つて閑暇なり。

社中小品に「豐後國佐伯」の題にて十日、十一日、十二日の三日間を連載したり。吾が哀感これに由りて、深く佐伯生活の當時の回想のうちに動きぬ。

昨夜は吾が宅にて青年會を開きたり。比較的に盛會なりき。吾が宅にて青年會を開きたるはこれが最初なりとす。

今日午前教會堂に出席して植村正久君の說教をきく。午後は富永德麿、尾間明、山口行一の三氏と共に並河平吉君を本郷大學病院に訪ひぬ。それより上野に出で遂に道灌山の方まで散步したり。春日麗らかに輝き、新芽綠葉、風にざわつき、吾をして春の光のうちに融化せしめたり。

歸路、籤そばに至りてやぶそばを食ふ。

歸宅し見れば野村勉少尉の書狀ありたり。

昨日市山たき孃より書狀あり。兩三日前われ母の意を受けて上京來遊の旨を傳へたれば其の返事なり。たき孃は目下橫須賀の親族に在り。

昨日、銚子なる叔父來宅せられ今朝歸られたり。これ母の弟なり。

占領地盛京省の部分を支那に返す事に決したるものゝ如し。蓋し露國以下の干涉の結果なり、就ては今度出づべしとの噂ある占領地返却に關する詔勅に於ては十分事實を明記して露國等干涉の結果遂に此の大屈辱を被るに至りし事を全國民に宣言するを急務とす、との意見を起しぬ。これを同志の人々に通ぜんと思ふ也。

「豐後國佐伯」に就ての執筆は、吾をして次の如き發見を得しめたり。則ち、作れ、然らば成らん。作れ、然らば發明する處あらん。作れ、然らば自から熱情觀察の發達を見ん。

今はわれ大に苦しみつゝあり。則ちわれ政治家たる可きか。詩人たる可きか。實際家たる可きか。豫言者たる可きか。これなり。

國家の多難なるは吾をして前者たらしめんとし、人生の觀察は吾をして後者たらしめんとす。生きて肉體に由りて事情を作り、互に隔離せらるゝと雖も等しく一死の必ず來る可き命運に由りて、不知深酷の國に合一すべきを思ふ時は、路傍の人にすら猶ほ握手せんことを欲するの感ある也。

吾は自由なる天地の靈の一なるを自認し得たるが故に詩人たる可し。

十四日。

昨日愈々遼東半島返還の詔勅出でたり。

これ吾國外交史上の大失策なり。

歐洲諸國が東洋に干渉するの端これより發せん。

露國が日本を侮るもまたこれよりせん。

日本澎張史もしばらくは中止なるべし。

嗚呼世界國民の歴史は如何なりゆく可きか。

人見市太郎氏のユーゴーを讀みて今日午後を消したり。ユーゴーよりもカーライルは大なり。眞なり。深し。ウォーズウォルスはユーゴーよりも更らに豫言者なり。

無限なる蒼空の下に、過去の見る可からざる人も、隔離して逢ひ見る能はざる人も、悉くわれと等しく此の無限なる蒼空の下に生活呼呼せしを思ひ、またするを思へば一種の平等親和の感起り來るなり。

古も今も。

十六日。

爾若し心さわがしくして情澄まざるを苦しむ時は、爾聲を靜かにして愛讀の詩を唱し來れ。これ神の聲をきくの道なり。爾は爾の哀感を以て充たされなん。

二十一日。

人生夫自身は此の不可思議なる生命その物に對して必ず眞面目なるもの也。

二十二日。

數日來の事を記し置かんと欲す。

國民之友未だ解停にならず、至つて閑散なり。

十九日（日曜日）午前は教會堂に訪ふて植村正久君の說教をきく。「淡白に祈れ」の語、「神を父と思へ」の意、吾を動かすこと少からざりき。午後富永、尾間の兩氏と收二同道にて牛込より小石川の郊外を散歩したり。關口の水道の樹蔭の美、西の空より湧き出づる夏らしき雲の光、平野綠蔭、凡て自由談話のうちに看得、冥想したり。

歸路、富永氏等を顧みて曰く、吾等天國の郊外に在りてまた手を携へ散歩したきものならずやと。

吾、自から斯く語りし時に無窮の愛、限りなき希望を感じぬ。

二十日の夕暮、これを大久保余所五郎君に語りしに氏の曰く、何ぞ夫れ舊信仰なるやと冷笑一番す。

吾れの曰く、然らず。これ絶高なる人情自からが敎ゆる詩的眞理なり。眞理なり、形容に非ず。されど實際的にして且つシンセリティなる能はざる大久保氏の如きには到底此の消息を解し得ざるなり。

How I became A Caristian を讀みつゝあり。著者は内村鑑三氏なるべし。感ずる處少なからず。

昨日はわれ當直なりしため午後出社して夜十時歸宅したり。歸路神田區の方にめぐり、書店にて露伴氏著葉末集の古書を求め歸りぬ。

昨日午前は池田米男君來訪。氏は鹿兒島の人なり。氏より鹿兒島に起りたる二三の悲慘なる事件をきゝぬ。

兩三日前伴武雄氏に書狀を出したり。見舞狀なり。氏は死につゝあり。

十八日の夜「ローラン夫人とカンネーの姉妹の交り」を譯して家庭雜誌に送る。

心に平和なし。徒らに自から苦しむ。

曰くわれ何を爲す可きやと。これ古るき〳〵疑問なり。幾度か決して已に幾度か打破りたるものなり。

曰くわれ全然美文を草する人、物語りを造る人、人情を說く人、自然を歌ふ人たる可きか。詩人たる可きか、一言以て言へば「文學の人」Men of letters たる可きか。

曰くわれ實際の政治界に縱横奔走して今日の吾が國を政治的方面より救ふ可きか。曰く斷然、傳道師たる可きか。

耳に私語く聲あり。汝は一農夫、一樵夫にして足るに非ざるかと。

吾が今日の境遇は其の何れを撰ぶもあへて窮する處に非ず。

されど吾が人生に於ける信仰は果して何を撰ぶ可きか。

否な吾が性は果して何れに適す可きか。

神樣、希くは判斷を與へ給へ。神の道に曰く、たゞ誠實なれ、たゞ熱心なれ、たゞ同情あれ、たゞ勇氣あれと。若し夫れ此の如くんば爾何れに向ふとも可なり。何を撰ぶとも可なりと。

然り、然り。されどわれ常に誠實なる能はざる也。同情ある能はざる也。熱心なる能はざるなり。勇氣ある能はざるなり。

故に此の感あるなり。

われ吾が直感の深きを知る。われの文筆の能あるを信ず。われに教ふ可き眞理の光あるを知る。吾は「見る」なり。われは「見能ふ」なり。「感じ得る」なり。

然らばわれ遂に詩人たる可きか。

神よ判斷を與へ給へ。吾は吾が心を信ず。吾が心の見る處は神の眞理にして人の命なるべきを信ず。

われ詩人たるべし。

われは自由の靈なり。故に詩人たるべし。

二十三日。

吾は吾が神を、より明白に見たく、より親しく接したく、より強く愛したし。

神の愛をより深く感じたし。宇宙茫々たり。感情紛々たり。神自づから朦朧たるを免かれず。

われ茲に在り。深夜獨り坐す。

たゞ夫れ獨り在り。此の世界に於て今獨り坐す。

二十四日。

吾は吾が、不信仰と不シンセリティと愚昧無學とに慚愧苦悶しつゝあり。吾が罪にもだへつゝあり。

吾はクリストイエスの如く神を明白に見て眞實に愛慕信仰する能はず。吾はウォーズウォルスの如く自然の生命、力、感化を感得する能はず。吾はカーライルの如く此の不思議なる宇宙人生のミステリアスに就てシンセリティなる能はず。ゲーテの如く自然と人情とを博大深遠に抱擁感銘する能はず。

是等は皆な人なり。而して吾は自から是等の人々の崇高なるを信じ乍ら其の如くなる能はず。

二十七日。

先づカーライルを打ちたる光と等しき光を受けてシンセリティの域に至らんことを務めん。次ぎにウォーズウオルスに依りて自然の至大と人情との交通の眞理を學ばん。最後にクリストイエスの十字架に依りて、神を父と呼び得るの大信仰に達せん。

これ已に吾が多少の經驗なり。更らに進んで此の道によらんことを欲す。

夜一時記す。

眞理を求むるに熱心、義を行ふに嚴格、神の愛と智とを信ずるに確實、人情の圓滿を期するに誠實、美を享くるに眞面目、これ吾が目下の題目なり。

六　月

十日。

筆をおきし以來忽ち二週間を經たり。

其の間吾に關する重なる事は左の如し。

國民之友二百五十二號及び二百五十三號を編輯したる事。

德富猪一郎氏吾に非常の侮辱を加へたる事、由て退社せんと決し父母の同意を得たるが故に時機を待ちつゝある事。

内村鑑三君と書信の交を結びたる事、われ非常に此の剛毅なる人物を慕ふ事。

佐々木豐壽女史夫妻の招きにより國民新聞社及毎日新聞社の從軍記者と共に晩餐の饗應を受けたる事、（其の時はじめて其の令孃を見たり。宴散じて既に歸らんとする時、余、携ふる處の新刊家庭雜誌二册を令孃に與へたり。令孃曰く、また遊びに來り給へと。令孃年のころ十六若くは七、唱歌をよくし風姿楚々可憐の少女なり。）

田村三治氏と共に山本繁子女史を訪問したる事、女史は年若かき畫工なり。

吾が宅にて青年會を開きたる事、われ「忘るゝ能はざる會」てふ題にて感話したること。

水谷眞熊氏より來狀、返書差出したる事（氏は病氣にて目下福岡病院に在り。）

眉山川上亮氏を訪問して國民之友夏期附錄を依頼したる事。

煩悶また煩悶、失望と希望と相戰ふ。

失望は「われ果して爲すあるの人か」の自問自疑より來り、希望は「神います」の信仰より來る。

十九日。

少しも讀書せざるなり。

信仰は依然として進ます。

社務多端なり。（國民之友編輯）

文章を草すること少なからず。
佐々木豐壽氏を訪問す。（石崎ため氏の事を依賴す）
森田思軒君を訪問す。
内村鑑三君より書狀ありたり。
藥師寺育造氏より來狀。（海城より）

二十一日。
國民之友、二百五十四號の編輯を昨夜終結したり。今日以後五日間は多少の默思、讀書あるべし。

夏は來りぬ。
樂しき夏は來りぬ。自由の異名なる夏は來りぬ。
二十三日　日曜日。
神よ、吾が罪をゆるし給へ。
神よ、人の前に恐るゝ事なく、

先づ神の前にひれふす事を敎へ給へ。
人に仕ふる前に神に仕ふることを敎へ給へ。
神よ。全能の神よ。愛の神よ。
此の苦しめる罪人に慰安を與へ給へ。
爲す可きを敎へ給へ。
神よ、あなたの御前に、常に眞實謙遜せしめ給へ。
常にあなたの御前に在ることを感ぜしめ給へ。嗚呼此の不可思議なる「神の世界」に、
吾は「人の世」のみ見て苦しむ。
神よ、神よ、神よ、
淺薄にして不眞實なる吾を敎へ給へ。

就眠の前、此の筆をとる。
此人間の世界、人間の生涯、其の不思議なる事は依然たる也。爾決して、其の不思議になるゝ勿れ。

不斷、此の不思議に痛感せよ。
爾の常に思ふ處は此の人生の如何に不可思議にして幽玄なるかにぞあるよ。
區々の事に思ひ煩ふ勿れ。

不思議なる哉。此の紛々たる人の世。人の生涯。人類の歴史。此の天地萬有。此の吾。凡てこれ
不思議なる哉。

二十五日。

近頃、北海道移住、農業を營み、獨立獨行したしとの希望起りたり。其のために、參考として數日前、弟收二は國民新聞社より左の三書を携へ歸りぬ。

北海道農業手引草
拓地殖民西錄
北海道地質略編

而して、われもまた、友人小谷弓彦氏より左の二册を得たり。

北海道移住之栞　一編、二編。

小谷氏は北海道協會の役員なり。
昨朝、社用にて竹越氏を訪問したる節、氏より北海道移住の事を多少傳聞したり。
午後佐々木豐壽氏を訪問して傳聞するを得たり。
文學者を訪問し、新聞社員と交際し、近來益々獨立自由の生活を望むに至りぬ。
雇はるゝ者は如何なる口實と體裁とを以てするも多少の奴隷たるを免かれず。
寧ろ自然と戰ふ可し。勞苦を撰んで自由を取るべきなり。

土曜日（二十二日）の午後一時過ぎより築地なる府立尋常小學校生徒のために厚生館の一室に於て乘艦中見聞の演說をなす。五百餘名集まる。此の演說を了はりて後、直ちに紅葉山人を訪問し國民之友夏期附錄を託す。辭す。小西氏の譯文を改作することを諾す。夜小西增太郎氏を訪問す。此の事を語る。氏もまた諾す。トルストイの一作を得。昨日午前、竹越與三郎氏を訪問して此の事を語る。
晝飯を竹越にて食す。歸路、塚越君を訪問す。また內田千代猪夫人を訪問す。また佐々木豐壽氏を訪問す。晚食を佐々木にて食す。歸宅は夜八時過ぎなり。

今朝露伴を訪ふ。午後齋藤綠雨を訪ふ。また紅葉山人を訪ふ。皆な附錄に關する用事なり。

二十七日。

神に祈る。

天にまします神よ。愛にみち給ふ神よ。吾が心の苦しみを取り去り給へ。凡てを神にまかさしめ給へ。

古より今に至り、生より死に至り、凡ての法を治め給ふ神よ。死せる吾が友伴氏をめぐみ給へ。幽冥をたどるかれをあはれみ給へ。吾等生けるものをめぐみ給ふと等しく、死せる吾が友をあはれみ給へ。いつまでもかはる事なく吾等友を愛するの眞理を確く信ぜしめ給へ。

吾等兄弟が目下企てつゝある、自由獨立の道を宜しきに導き給へ。希くば吾等をして凡て世の束縛より脫して高潔自由に生活するの法をとらしめ給へ。

自然の兒たらしめ給へ。山林の兒たらしめ給へ。人情を自然のうちより見出すの敎をとらしめ給へ。勞働の貴きを學ばしめ給へ。

北方の荒野に辛苦艱難を忍ばしめ給ひ、以て眞の生活に入らしめ給へ。吾が老いたる父母をあはれみ給へ。願はくば兒等の愛情を以て、其の愛情を一致せしめ給へ。

兒等を父母の誤解より救ひ給へ。

堅實なる覺悟、斷然たる決心、周密なる用意を以て此の道を着々行はしめ給へ。必ず吾等を北海の陸に送り給へ。

三十日。

吾が求むる處の者、何ぞや。

吾が信ずる處の者、何ぞや。

吾が爲すべき者、何ぞや。

名と利とこれ吾が求むる處に非ずとせば、吾が此の世に於て求む可きもの何ぞや。吾は何を得んとて斯くまでに悶くぞ。

否、否、吾果して名と利との誘惑を感ぜざるか。

吾が求むる處のもの、戀か。

七月

三日。

夜更けて此の筆をとる。

一日の朝、津田仙氏を麻布本村町に訪ひ、北海道の事を尋ねたり。

二日の朝、女子學院校長矢島かぢ子女史を訪ひ、石崎ため孃の事を依頼したり。午後、千屋氏に贈品の事に就て奔走す。

昨日より今日にかけて、小説に執筆す。未だ成就に至らず。

北海道行は自由獨立信仰のために必ず實行すべきものなりとの意愈々熾なり。

昨夜、熱涙神にいのる。

吾が心は苦悶を脱する能はず。刻々自から問ふ「吾何を爲す可きや」と。

反みて自己の短才、無學、下劣、浮薄なるを痛嘆し、神に仕ふる人に非ざるを泣く。

嗚呼神に祈る事を忘る勿れ。

四日。

今後、毎朝事をはじめ、業を行ふ初めに於て、第一に神に祈禱する言葉を此の「欺かざる記」に記すべし。文字は心の印象なれば也。

在まさゞる處なき大神よ。わが弱きを憐れみ給へ。愛に富み給ふ神よ。希はくばわが罪をゆるし給へ。わが爲す事を敎へ給へ。

天にいます父よ、天地の主なる神よ。御心のある處に從ふの勇氣を常に祈りの中に得さしめ給へ。

われは父の子なり。神はわが父なり。

わが情の自然を信ず。其の自然の發露に從はしめ給へ。

神よ、あなたによりて強く、正しく、清からしめ給へ。

神よ、善を限りなきあなたの法律に歸せしめ給へ。善に依りて望を有たしめ給へ。

不思議にして神聖なる世界に於ける人の靈を導き給ふ神よ。限りなき人の望を確かに有たしめ給へ。あなたの眞理に從はしめ給へ。

多くの暗き靈を憐れみ給へ。吾が母の靈の暗きを照らし給へ。父を救ひ給へ。

吾が行によりて、神の愛と、美と、眞を證するの榮を得せしめ給へ。死にし伴武雄氏の靈の救を得さしめ給へ。

夜、記す。今夜吾が宅にて青年會を開きたり。

會するもの吾等兄弟の外に四人ありしのみ。
今日午後出社したり。福地源一郎氏を訪問したり。不在。下宿屋を探したり。

目は目を招き、口は口を引く。
月の美は神の美なり。花の美は神の美なり。これを感ずるは人間の靈の美なり。
迷ふて苦しむ人の靈は、月を拜して且つ慰めを求む。これ自づからの人情に非ずや。
人と雜談する時、神聖の世界、無極の生命を忘るゝ勿れ。
神の義と自由を求めて倦むこと勿れ。
己れ獨自の心中にて描く空想は人に關係なし。故に自由勝手なり。たゞ人に對する時に當つてはすべからく一個、神を信ずる男子として徹頭徹尾、眞實正義を以てすべし。靜かに良心の指揮に從へ。

五日。
神よ、希くは世の慣習より脫出して自然の兒として立たしめ給へ。
義を求めて決行せしめ給へ。

凡てを汝にまかせ、たゞ決然として、無窮の眞理に從はしめ給へ。
北海道移住の事に就き、宜しきに導き給へ。
交友の間をして益々高尙、純潔、眞卒ならしめ給へ。
午後芝區兼房町十四番地柴田ツル方に下宿す。
月明に乘じて散步したり。佐々木氏を訪ふ。

六日。
神よ、凡てをなし給ふ神よ。
自然の兒たらしめ給へ。
區々の事に思ひ煩ふことなからしめ給へ。
人の前に正直ならしめ給へ。
善を行ふに率直ならしめ給へ。
倦むことなく、變はることなく、光を求めしめ給へ。
人の靈を賊するの言語擧動を行ふ時に於ては、爾の靈來りて吾を止め給へ。
人の前に恐れざる、神によるの勇氣あらしめ給へ。

内村鑑三氏との交りをして益々眞卒深情ならしめ給へ。
父母の靈の暗きを救ひ給へ。
吾が爲さんとする文學の事業を守り給へ。
眞面目ならしめ給へ。

今朝早起、社に到る。内村氏よりの來狀ありたり。
返書を認めたり。

昨日午後野村少尉(房次郎氏)來る。
本夕同道、は印と稱する處にて會食したり。
山口行一氏脚氣衝心のため死去したる旨、午前九時頃尾間明氏より通知し來りしが故に直ちに牛込に赴く。
茫々乎として夢の心地す。
七日。

一日を正しく送りて安らかに眠らしめ給へ。
山口行一氏の父母の悲みを和げ給へ。
人間の死を深く思はしめ給へ。
此の不思議なる汝の實を感銘せしめ給へ。
九日。
七日の朝、山口行一氏の葬式に會し、落合村火葬場に至る。

國民之友編輯は明日了はる。今後五日間の事を定め置く可し。
How I became A christian を讀み了はる事。
山口行一氏の事を記して家庭雜誌に投ずる事。
「當直の夜」を成就すべし。

創作と讀書とは必ず並行せしむ可き事、これ決斷なり。今日まで大に惑ひたる處なり。

父母の銚子行を送る。（午後八時）

十日。

神よ、吾に勇猛堅固の氣象を以て突進するのインスピレーションを給へ。

午前十一時四十五分發の瀛車にて行一氏の阿兄、骨を携へて歸京するを送りぬ。

十一日。

午前出社、午後退社。

夜、内村鑑三氏の「ハウ、アイ、ビケーム、エ、クリスチアン」を讀む、明日は必ず讀み了はらざる可からず。

神よ、吾が心に有る、有らゆる願ひをきゝ給へ。

神よ、吾は神のみめぐみを感ずること能はざる者なり。

「神のめぐみ」とは吾に取りて何の意義もなし。

神よ。汝吾を憐み給はゞ、此のかたくなゝる心を和け給へ、汝のめぐみを感謝するを得しめ給へ。

吾が友、山口行一は死したり。突然死したり。

神よ。死の恐ろしき事實を痛感し得しめて、永久の命なる套語に眞意義あることを敎へ給へ。

われをして、英語と獨逸語とに通達せしめ給へ。吾が勉學を助け給へ。吾が父母を安からしめ給へ。

行一氏の父母の悲しみを和け給へ。

吾がシンセリティを復活發達せしめ給へ。

自由獨立の生活を與へ給へ。

人の世界の爲めに吾が盡す可き事を示し給へ。

祈る可き事を敎へ給へ。

心のまゝに祈らしめ給へ。

吾が諸友をめぐみ安からしめ給へ。

吾が愛戀を清く、深く、永く、强からしめ給へ。彼の少女の愛を吾に與へ給へ。

自殺の迷ひより吾を止め給へ。

失望より必ず吾を救ひ給へ。

廣く世を愛し、人を思はしめ給へ。

十二日。

吾が靈は光明を望めども、吾が肉は暗きに誘はんとす。世は罪惡は滿たされ、人は主義の肉塊に過ぎず。互に惡み、そねむを知りて、眞の愛なるもの何處に存するぞ。

吾は吾を失望し、また世を失望し、他の人の愛を疑はんとす。

自然は冷然たるのみ。人は煙に歸し、灰に解け去る。此くの如くにして希望と平安と光明とを吾は何處に求めんとするぞ。

十三日　朝記す。

昨夜、佐々木豐壽氏を訪ふ。十時まで談話して歸る。

歸路、少しく狂氣せり。或は狂氣に非ざる可し、本氣なるべし。然り本氣なり。

愛なる言葉は虛僞なり。人は悉く主義の肉塊に過ぎず。世界は魔殿のみ。死は消滅なり。

不死とは人をごまする信仰なり。人は互に食ふ動物の一種、品のよき虎、狼、蛇のみ。これ形容に非ず。事實なり。實際が證明し、歷史が證據立つる事實なり。

人情と獸情とは、科學的に云へば世界に行はるゝ同等の現象に過ぎず。

自然とは知る可からざる怪物なり。

人に威張るは積極的主義なり。人に頭を下ぐるは消極的主義なり。

戀愛、友愛、悉く主義の變形のみ。悉く肉の臭氣なり。土の上に生くるもの、肉に非ずして何ぞ。

余は死を恐れず。何となれば生の貴きを知らざればなり。

人間は天性死を恐る。蓋し動物的作用に過ぎず。

人は忽然として死するに非ずや。山口、伴、古川の諸青年は如何。彼は夢の如くに此の世界より失せたり。土となり、灰となり、煙となりたり。これ吾が目前に行はれたる事實なり。

此の世界と此の人間とは意味もなき盲動に過ぎず。これ幻なり。

青き章も黑き土となりておつ。

曰く朝鮮問題、曰く露西亞の東方運動、曰く英國の外交。何となく意味ありげなり。されど、一個人間の主我的、自利的の作用のみ。

宗教家を見よ。何ぞ醜怪なるや。何ぞ自利的なりや。

これ實相なり。眞相なり。理想は妄想のみ。人間の少數者の夢のみ。

有りし者も悉く消えたり。これ極めて怪しき現象に非ずや。
苦心經營する處は何のため、曰く、利己のため。
苦心經營を避くるは何のため、曰く、利己的動物作用。
苦心經營するは何のため、曰く、理想のため。
則ち空想妄想の利己的作用。
理想は人なき時に催す主我的妄想なり。人の面を見れば、世の中に出づれば直に吠ゆるもの也。
不死、愛、美、眞理、吾は信ぜず、吾は冷笑す。光なき處に光を求めるより、暗黑世界に暗黑を被るの更らに眞實なるに如かず。

十五日。

余は吾が感情を悉く逐ひ出し盡さんと欲す。
冷かに見て冷かに考へよ。
人間は利己の動物たるにすぎず。感情も利己のためには音樂に動き、月光に動き、愛人の唱歌に動く。宇宙は盲目なり。意味もなく、目的もなし。
人は浮沈の木片のみ。

自殺も容易なることなり。人を殺すも一舉手に過ぎず。
吾は極めて冷かに、極めて眞面目なるべきのみ。凡てが面白くなく運ぶ時に、自殺すれば足りなり。吾が目前に吾を恥しむるの人立つ時打ち殺すの法を取れば足る。
若し出來可くんば、
されど之れも又感情の言ふのみ。
左の如くなれ。枯淡たれ。

十六日　夜一時過ぎ。

昨夕湖處子君來宅談話。氏吾にすゝむるに佐伯滯在中の事を、著作に現はすべきを以てす。
今朝佐々木氏を訪ふ。のぶ子孃と語る。
今夕抱一庵原余三郎氏來宅。
今夜のぶ孃に一書を認む。

吾が友は忽然と二人此の世より去りたり。
吾は平然として何の痛感大悟もなし。

吾が情は此の恐ろしき大事實に動かず。
世間の小事紛々たる自利の事に忙し。
これをしも吾をシンセリティの人と言ふを得べき乎。
吾が切に此の大事實に就て痛感せん事を欲す。而も痛感する能はざるは奇なる哉。
人は眞面目なる事難し。

二十日　降雨連日。
夜十一時記す。
國民之友第二百五十七號の編輯を今夜了はる。
昨朝は紅葉山人を訪ふ。夏期附錄の件也。

「佐伯に於ける一年の生活」に就て熱血をそむる程に著作せんと欲す。此著作を以て吾舊生活を閉ぢ、直ちに北海道風雪のうちに投ぜんことを期す。

佐々木信子孃との交情次第に深からんとするが如し。戀愛なるやも知れず。

二十一日。
午前九時より佐々木に至り午後四時歸宅す。
薄暮芝公園を散歩す。
歸りて「欺かざるの記」（佐伯に於けるの一年の生活）を作りはじむ。緒言八枚を作り了はる。

吾は恐らく戀愛者たるに非ざる可し。唯だ何となく女性の友を好むなるべし。

二十五日。
昨日より「死」を作りはじめて已に四十餘枚を書きぬ。「欺かざるの記」を成就する前に此著を了はらんと欲す。
昨夜佐々木氏を訪ふ。十時まで談話す。今夜も亦た至る。
幽愁暗影の如く吾が心を被ふ。

吾此の天地に存す。此れ最初の事實なり。死するとも生くるとも此の宇宙の吾は終に宇宙の外に出づる能はざる可し。

不窮の天地。吾茲に生れて存す。武雄氏は消えたり。信一君は消えたり。何處にかゆきし。彼等何處にかある。此宇宙に於て彼等如何にせしか。

「死」を思へ。「死」を究めよ、「死」を見よ。之れ「死」の著ある所以なり。

愛と死と相關する如何。

人は何故に「死」を忘るゝか、「死」を感ぜざるか。

二十九日。

過ぐる四五日の中に於ても吾が心の如何に悶き苦しみしぞ。

吾は少しも平和を得ざるなり。

神と神の子の信仰に非ずんば吾を救ふ能はざるを知りつゝも確固たる此の信仰なき也。常に主我の妄念に苦しむのみ。之れ神の罰ならむ。

昨朝佐々木信子孃來宅ありて、一時間半計りを一秒時の如くに過ごしぬ。孃は釘店なる孃が父のもとに所用ありて外出したる途に秘密を以て立寄りたる也。吾等は遂に秘密の交情を通ずるに至りぬ。之れ全く孃の母豐壽氏が邪推よりして、遂に孃と吾れとを騙りて茲に至らしめたるなり。

吾等は戀愛に陷らざるを得ざるに強られつゝある也。束縛は却て戀愛の助手のみ。

一昨夜孃が送りたる來狀は吾をして泣かしめたり。孃は眠り能はざる程に苦悶しつゝあり。

神よ我等を善しきに導き給へ、高き清き深き強き愛戀に導き給へ。

われ遂に勝つ可し。決して失望する勿れ。強かれ。強かれ。け破りて進む可きのみ。

德富をして其の慢慢を吾が前にふるはしめよ。

豐壽をして其の偏頗を吾が戀愛の前に行はしめよ。

放慢をして其の勢力を吾が弱點の前に横行せしめよ。

不信をして吾を墮落に陷らしめよ。

われ遂に何人、何もの、何事にも勝つべし。

決して赤面する勿れ。決して人の前に思はざる事を言ふ勿れ。之れのみ。

信子孃に向て、公然言ふ可きか。お互は實に戀愛に陷りてある事を。

八　月

一日。

わが生涯は更らに別種の途に踏み入りたり。

われ等は戀愛のうちに陷りぬ。

昨日、信子孃來訪す。北海道生活の事は互に其の夢思を同じくしたり。吾れ等は明言こそせざれ互に一生を通じて相携ふべしと約しぬ。

吾等が前途は夢の如し。吾等の前途は嶮路の如し。吾等は夢の如くに進まずして、一歩一歩、必ず此の嶮路を打ち越えざる可からず。

何の故に嶮難なるか、曰く、信子孃の母は吾等の戀愛に反對なればなり。

昨夜佐々木本支氏を釘店に訪ひ、德磨氏の病に就て葦問したり。

今朝また訪ひ、其所にて德磨氏に逢ふ。

昨日正午なり、信子孃の來りしは。

一時半頃まで、一秒時間の如くに語り、相携へて芝公園に至る。孃が歸路なれば也。觀工場に入りて買物す。出でゝ公園の内人影少なき處に至りぬ。樹下に憩ひて凉氣を取り、暫時語る。

共に一日の閑旅行を約しぬ。曰く、八王子の方面宜しかるべしと。

あゝわれは孃を得ざれば止まざる可し。母氏をして承諾せしめずんば止まざる可し。

戀するならば全身全心の熱血を注ぐ可し。

孃は吾が著作の成功を待ちつゝあり。夜半まで務むる勿れと言へり、必す病を得る勿れと言へり。

されど吾が成功を待てり。

吾等が戀愛はすべからく公明正大にして大膽なるべし。何物も恐るゝ勿れ。陰影にかくす勿れ。

日光にさらすべし。月夜に語るもよし。只だ二人語るべし。されどまた人の前に恥づる勿れ。

嗚呼一生！　何ぞや。今日のわが戀愛も昔語りとなるの日あらん。吾等の愛も何時かは土塊のう

ちに入らん。
神の永遠の生命を信ずる能はずんば愛戀程墓なきものはなし。
嗚呼一生！　前途の夢に迷ふ勿れ。今こそわが生命なれ。

ブライアントの Thanatosis を讀み且つ筆寫し置きぬ。ウォーズウオルスの Influence of natural を讀み深く感ずる所あり。

何事も全力をこめてなすべし。戀も。著作も。讀書も。戰爭なり。勝たずんば敗る。
"Up, up! What severethy hand to do, Do it with thy whole night,. Work while it is Called to day, the night cometh, whevein no man can work"

信孃より今夜書狀來る。
其の中に曰く、小妹はいま明らかにいふ。大兄と相對してかたらふ其時は實に小妹の本心の現はるゝ時なり、何もかもうちあかして語る誠によろこばしき限りに御座候、家にありて種々苦痛も小妹は常に大兄と相見る其時の樂みを思ひ出し自ら其時を待つべしと思ひよく心を慰められ候云々。
然らば之れ己に戀愛に非ずや。

二日。
今朝信孃來りぬ。八時十五分より十時まで語りて去りけり。
孃とわれとは最早分つ可からざる戀愛のうちに入りぬ。たゞ未だ互に其の戀てふ文辭を公言せざるのみ。
此の次の對面には吾より公言す可し。最後の言葉を約す可し。

午後三時まで「死」を作る。
三時過ぎより佐々木氏を訪ひ、萱場三郎氏と相知る、氏は農學士なり。
古人の一詩を得て編輯者の机上に置きたり。
希くば眞理をかたく信ぜしめよ。

クリストが示し給ひし眞理を堅く信ぜしめよ。
曰く、神の愛。罪のあがなひ。永久の命。善の勝利。生存の義務。

嗚呼不可思議なる世界に於ける此の不思議の生命其のもの。眞理を認めずして、孰れがよく堪ゆべきぞ。

三日。

基督教信徒であり乍ら何故に吾は其の傳道に全身全力を打ち込む能はざるか。基督の教、バイブルに示す所、是れ宇宙人生の不思議を說明してもらす處なき眞理なりと信ずるが故に非ずや。然らば何故に其の眞理を他の不幸なる人に傳ふるに躊躇する乎。

何の故を以て、敢て他の事業を撰ばんとする乎。

眞理。之れ生命に非ずや。

爾の口實は之れなり。曰く、我れは傳道事業の性質上不適當なり。曰く、吾が適任と思ふことをなす、之れ則ち神に仕ふる所以也、と。

而して其の撰ぶ處の業を見れば、曰く文學、曰く、政治、曰く法律、曰く商業、曰く新聞記者、

曰く教師、曰く農業。

嗚呼之れ其眞理を解したる人の撰擇なり。

されど欺く勿れ。われ自からわれを欺くに非ざる乎。眞理は是れ生命に非ずや。爾若し眞に基督の教、バイブルの示す處の眞理を解したりとせば、眞理其者は直ちに爾を驅て、此の福音の宣傳者たらしめざる乎。眞理其の者の力は必ず爾のあらゆる口實に勝つ可き筈なり。

然るに口實は爾を支配す。見よ、見よ、爾は未だ眞理を解し居らざる也。

爾の信仰極めて淺薄なるもの也。爾の實際は極めて曖昧にして利己なるもの也。爾は決して眞の基督教徒に非ざる也。

眞の基督教徒は必ず教の爲めに其の地上の生命を費す。其の汗、其の血、其の涙、一滴たりと雖も教のためならざるを惜しむ可き也。

西行は世は無常なりと感ぜり、「無常」は彼を驅て世を捨てしめたり。無常を語るもの世に猶ほ多し。而して其の多きもの未だ嘗て世を捨てざる也。

何となれば、彼等は未だ無常其者の眞の消息を直感したるに非ざれば也。實に是れ人心欺く可からざる自然の作用の結果なり。

吾此の如く信ずるが故に自から顧みて問はんとはす。爾は基督教徒であり乍ら何故に其の眞理の宣傳のために全身全力を盡さゞる乎、

其の傳道のために一生を擲たざる乎、と。

何故に、何故に、何故に。其の答は極めて單明なり。曰く　われいまだクリストイエスの敎へたる、其の、バイブルの示したる眞理を生命とする能はざれば也。そは又た何故ぞや。

此の答も亦た、極めて單明なり。曰く、われは「虛榮」を生命とすれば也。（朝早く認む）

われいま「死」を作りつゝあり。されどわれ自から殆んど何の用をなすかを知らざる也。われ若し此の著作に成功せば必ず小說家を以て世に立つに至るべし。

小說家！　詩人！　文學者！　これ何ぞや。僞多き名なる哉。空しく響く名なる哉。

六月。

一昨日（四日）早朝東京を發して鎭遠見物に出掛けたり。同伴者は收二及び佐々木佑二なり。歸路逗子なる德富猪一郎君の避暑宅に立寄る。

昨朝信孃來る。吾れ床上に橫はる。一昨日余はラムネを飲みたるため下痢を起し腹痛を感じたれば也。終日病床に在りたり。

今朝のぶ孃より來狀あり。筆末に曰く「片時もはなれず候君がおもかげ」。可憐の乙女、爾も終に戀に沈みぬ。よし、然らば、限りなき戀愛の泉をくましめよ。

われは今も猶ほ苦しみつゝあり。何をなす可き乎を知らざる也。吾れは幾度か詩人たり、文學者たるべしと思ひ定めぬ。されど、今は「傳道」を望むの心生じたり。一身然り、此の地上に於ける僅少なる一身の生命を傳道に費す可きを思ひぬ。

されど未だ其の何れにも定むる能はざる也。

これ恥づ可きの事なり。

吾れに吾を安からしむる信仰なし。神の眞理吾れに未だ明かならず。

何故にわれは自殺し能はざる乎。

われは自殺の罪なる可き眞理を解せざるなり。故に罪なるが故には自殺せざるには非ず。

われに希望ある乎。曰く、なし。
吾れに平和あるか。曰く、なし。苦惱のみあり。
われは何事も面白ろきを感ぜず。
然らば何故に自殺し能はざる乎。死は萬事休す、最一の平和に非ずや。
われに一個の鋭利なるナイフあり、以て胸を刺すに足る。
一擧手の事。
十分にして或は五分にして足る。僅かに五分の苦痛。
わが父母、わが弟、わが戀人、わが友、すべて後より吾を追ふ可し。
彼等も遂にわれと等しかる可し。
僅かに數十年、若しくは數十年の遲速、
遲かれ速かれ、等しき運命。
ナイフ用意せられたり。何故にためろふか。
一擧手の勞。
眼をあげて見る。カーライル、テニソンの肖像、アヽ彼れ等も已に死してある也。死園の民に非

ざる乎。かの麥藁帽、之れ山口行一のかたみなり。彼れ今何處にある。死の園には友多し。友多し。行一も在り。武雄も在り。
一擧手の事。
何故にためろふか。
嗚呼われはたゞためろふのみ。其の理由を知らざる也。
たゞ一個われを憤激せしむるものあり。曰く自殺は薄弱の行爲なり。
平和を得ずんば、得るまでは戰へ。希望なくんば希望生ずるまで苦戰せよ。自殺は薄弱の行爲なり。
されど、われ已に此の憤激を彈力なきまで用ひたれば、今は殆んどわれを立たしむるに足らず。
欺く勿れ。われは未だ眞面目ならぬなり。自殺もなし得ず。希望もなし。
われは憐れの男なり。あゝわれは世にも憐れの一人なり。自殺する事も能はず、さりとて希望も
なし。苦悶のみ、あゝ苦悶のみ、名づけ難き苦悶のみ。
たゞ此の肉體を古びたる衣の如くにまとふ。しかも脫ぎ捨つる能はざる也。

全世界をも征服せんとの大希望ありたる男子。
立てよ。
馬鹿を言ふな。弱き事を言ふな。死する勿れ。斷じて死する勿れ。自殺する勿れ。
無窮永劫に生く可し。
立て、立て、立て。戰へ、戰へ。何でもよし何事でもたゞ爲す可し。
宇宙は全體なり。自殺したりとて、吾れは吾れ也。宇宙の外に出づるに非ず。
弱き事を言ふな。まけるな。立て。戰へ。爲せ。打て。殺せ。突け。蹴れ。何者か汝をさまたぐる者ぞ。打て、殺せ、けれ、突け。
決して自から殺し、自から敗れ、自から退き、自から失望する勿れ。眞理を求めて止む勿れ。
神の兒たらずんば止む勿れ。
裸體にして天地に立て。

基督教の眞理！　吾れを救へ。
神の愛。神の子の愛。永遠の生命。義の勝利。人間の愛の結合（朝記）

此世は未來の用意なり。此世は靈魂の試驗場なり。學校なり。練習場なり。人間の希望は肉を脱したる靈界の神の國に在り。
時間は肉の爲めに設けられたる靈の發達場なり。
心を靜めて人を見よ。眞理を見よ。

「日本人」第三號、雪嶺のウエンデル・ホルムスと題したるうちに曰く、彼れ曾て論ずらく、基督教徒は樂天と壓世とに分る。樂天者の發達せるは、顏容快活、音聲先盈、世の驩虞を悅びて敢て修飾すること莫く、住む所の斯地球を以て他の一層善美なる存體に移る可き練習學校となす。

われ獨り此の如く人生の事に苦む時、道をゆけば歌ひ乍ら來る職人に遇ひ、爭ふ所の車夫を見、乞食する翁を見、權をほしいまゝにする貴人を見、シャミの音の障子のうちに起るを聞き、而して悠々日月轉じ又轉ずるを見る。
嗚呼人間の事遂に如何。

今夜種村正久氏を訪ひ、吾が「傳道」に關する心中の苦悶を告ぐ。氏の曰く、深く、熱く求むべし、道會から開けんと。

七日。

如何なる難苦にも忍ぶ可し。難苦はわれをして一段の進歩あらしむる推進器なり。

名を望まじ、利を望まじ。たゞ靈の發達をのみ願はん。靈の發達は人間の此の地上生活の目的なり。

罪と汚辱とに出入するも恐れ失望せじ。前程は光明なればも。

人間の地上に於ける生活目的、神の光に歸するための習練なり。

務めよ、忍べよ、勇氣あれ、善を行ふにためらふ勿れ。

德をたつるに躊躇する勿れ、懼るゝ勿れ、惑ふ勿れ。懼れ惑ふ事あらば靜かに一段高き處より考へて、神の前に其のよしとする心に判決せよ。

This Earth, thought beautiful, wasnot origonally ment as an angel-land.

It was meant as a School to prepere us for some other places.

That state is the best in which the best discipline of soul is possible and hence the original aim of creation of this Earth is best realized. When this is done ? We all way quit this earth, and go, soweg us to eternal bliss, and others to eternal no bliss, and the Earth itself to its original elements, as a thing that has finished its finishess.

十一日。

日曜日。

記憶して忘るゝ能はざる日なり。

本日午前七時過ぎ、信孃來る。前日孃と共に約するに一日の郊外閑遊を以てす。之れ寧ろ孃より申出でたるなり。余之れを諾したり。而して、之れ互に或る目的を有したる也。孃は此日を以て其心中の戀愛を明言し、余が決心を聞かんことを欲したる也。余も亦た此日を以て余が孃に注ぐ戀情を直言し孃の明答を得て、苦悶を輕うせんと欲したる也。互に默契したる此の閑遊は遂に今日實行を見るに至りぬ。されど勿論之れ秘々密々の事。孃と共に車を飛ばして三崎町なる飯田町停車場に至る。着する時、恰かも滿車發せんとする時なり。

直ちに「國分寺」までの切符を求めて乘車す。

「國分寺」に下車して、直ちに車を雇ひ、小金井に至る。小金井の橋畔にて下車して、流に沿ひて下る。

堤上寂寞、人影なし。たゞ農家の姉、童子等を見るのみ。これも極めてまれなり。

吾等二人、愈々行きて愈々人影まれなるところに至り、互に腕を組んで歩む。

吾れ遂に昨夜よりの苦悶及び吾か信孃に對する一切の情を打明けて語りぬ。

昨夜よりの苦悶とは、昨夜われ國民之友校正のため、社樓に在りて竹越氏と雜談の際、談たまゝ佐々木豐壽夫人の事に及び、而して竹越の曰く、豐壽さん今日吾宅を訪ひぬ、其の時の話の模樣によれば、信子孃を汐田某に嫁せしむる積りなるが如しと。此の言は極めて簡單なりしもわが心を刺せしこと、如何計りぞや。

彼女自身も承知の事ならん。果して然らば信孃は吾が愛を弄したる也。と苦悶、措く能はず、一言を載して信孃に送らんと一度書きて捨て、再び書し了はりて、机上に置き、寢に就きたり。

今朝は信孃と共に豐壽夫人の北行を上野に送り、上野より直ちに二人飯田町の停車場に會することを約し居たれども、余前夜の事を思ひ且つ天曇りたれば、上野に行かざりし。信孃上野より來り、閑遊を果す可きを促す。

すなはち、兎も角も、人なき自由の林に入りて吾が苦悶のありたけを打明けんと欲し、同意して吾宿所を出發したる也。

信孃は吾が腕をかたく擁して歩めり。吾れは一語一語、徐ろに語り、遂に戀愛するに至りし吾心情を語る時、感迫りて涙をのむ。孃も亦た涙をのむ。

孃の曰く、汐田某に嫁する云々の事は全く僞報なり。さる事はみぢんもなし、と。

孃は吾が愛よりも更らに切なる愛を吾に注ぎ居たる也。

吾等堅固なる約束を立てたり。吾等が愛は永久かはらじと。

余はブライアントの水鳥に寄する歌を語りて人生の永久の平和を語り、永生を語り、愛の無限ならざる可からざる事を語りぬ。

遂に櫻橋に至る。

橋畔に茶屋あり。老婆老翁二人すむ。之に休息して後境停車場の道に向ひぬ。

橋を渡り數十歩。家あり。右に折るゝ路あり。此道は林を貫いて通ずる也。

直ちに吾等此の路に入る。

林を貫て相擁して歩む。戀の夢路！ 余が心に哀感みちぬ。孃に向て曰く、吾等も何時か彼の老

夫婦の如かるべし、若き戀の夢もしばしならんのみと。

更らにみちに入りぬ。計らず淋しき墓地に達す。古墳十數基。幽草のうちに沒するを見る。

吾れ曰く、吾等亦た然るべし、と。

更らに、林間に入り、新聞紙を布て坐し、腕をくみて、語る。若き戀の夢！

孃は乙女の戀の香に醉ひ殆んど小兒の如くになりぬ。吾に其の優しき顏を重けにもたせかけ、吾れ何を語るも只だ然り〳〵と答ふるのみ。日光、綠葉にくだけ、凉風林樹の間より吹き來る。回顧。寂又た寂。

吾曰く、林は人間の祖先の家なりき。今は人、部會をつくりぬ。

吾等は今ま自然兒として此のうちに自由なるべしと。

默又た默。孃は其の顏を吾が肩にのせ、吾が顏は孃の額に磨す。孃の右腕、力なげに吾が左腕をいだく。默又た默。孃の靈、吾に入り、吾が靈、孃に入るの感あり。

吾れ、頭を擧げて葉のすき間より蒼天を望みぬ。言ふ可からざる哀感起る。

吾れ曰く、吾が心何となく悲し。されど悲しきは思ふに兩心相いだく、其の極に起る自然の情なるべし。

此の悲哀の感は、吾が戀愛の情をして更らに深く更らに眞面目ならしむと。孃はたゞうなづくのみ。

林を去るに望み、木葉數枚をちぎり、記念となして携へ歸りぬ。

境停車場にて乘車す。中等室、吾等二人のみ。

不思議に數停車場迄は一人の吾等の室に來るものなし。吾等は坐を並べて坐し、窓外の白雲、林樹、遠望を賞しつ、寧ろ瀛車遲かれと願ひぬ。余が歸宅したるは五時半なり。（十二時過ぎ）

十二日。

朝認む。

孃は吾れに許すに全身全心の愛を以てすと云へり。されど孃は一種の野心を有す。曰く、女子の新聞事業。

其の爲めに孃は合衆國に行くことになり居れり。故に孃は曰く、吾等は已に一體たるべし。されど夫妻となりて一家に住むに至ることは何年の後たるを計り知るべからず。

われ曰く、ヨシ、吾等は一家に住み得るまで待つ可し。されど夫妻は夫妻なり。われ等は自已の野心のために戀愛をも犧牲にするは酷なり。

吾等は何時までも待つ可し。たゞし、「待つ」は「冷ゆる」の意味たらざらんことを望むと。

孃また曰く、

われ若し戀愛に於て御身に失望せば、斷じて再び戀せじと思ひたり。されど今は互ひに心も打明けて知られ、之に越したるうれしき事あらずと。

われ曰く、

余は御身との戀を成就せずんば措かじと思ひ定めぬ。如何なる事ありとも成就さす可し。戀せば將に死するまでと決心せりと。

かくて互ひに語りしは未だ櫻橋に到らぬ前、一橋さびしくかゝる寂寞の場なりき。橋に立ち、流に上下を一目にみるを得。水流矢の如く、碧草のうちより走り、また碧草のうちに沒し去る。

信孃の美德は其の剛毅なるに在り、同時に温和なるに在り。

余曰く、吾等が戀は飽くまで純潔なるべし、高尚なるべし、堅固なる可し、大膽なるべし。此の四德の一を缺く可からずと。

純潔なる可きは、男女兩性の德のために。

高尚なる可きは、神に向ふ理想のために。

堅固なる可きは、互ひの相いだく心のために。

大膽なる可きは、世に對して恥づるなきために。

余曰く、

御身若し北米に去らば、われは北海風雪のうちに投ぜん。吾等が戀の前途は「悲運」なり。されど「悲運」何かあらん。

瀛車、林を貫いて急行す。窓外白雲深く、哀感交々起る。われ孃に曰く、余のために一曲を歌へと。

孃すなはち、「故鄕の空」を歌ふ。悲壯の調、實に斷腸の調なり。われ此の調に應じて悲歌一つ作る可きを約しぬ。孃は唱歌の達人也。

嗚呼戀愛！　戀愛！　若したゞ地上五十餘年の內の生命の香に過ぎずとせば、嗚呼はかなき夢なる哉。

吾等青年の時は忽ち去らん。一日再び來らず。

あゝ神よ。吾等は永久の生命と愛の無窮を信ぜんことを望む。

希くば人間地上の煩惱のために、愛の聖を破る勿れ。高、信、純の德をたてよ。

嗚呼吾が前程は世の謂はゆる幸運に非ず。われは敢へて荒野の試みに遇はんことを願ふ。此のわれの戀愛は悲運なる哉。されどわれ愛戀の德をして此の悲運に勝たしめんと願ふ。否な、悲運を以て戀愛の德を高めんことを願ふ。たゞ此の時、祈る、孃の愛如何なる時にも、惑はざらんことを。

戀愛も永生も神の信仰も、凡てこれ人間の痴情に過ぎずして、宇宙人生の眞相は冷酷なる不思議なりとせば、生命は分時も堪ふ可きものに非ず。

されどわれクリストの敎を信ぜんとするもの也。此の眞理を信ぜんとするもの也。

十二日。

心張りさく計りに苦し。

戀愛に永生の確信伴はずんばこれ靈魂の地獄なり。

今日午後、孃を訪ひぬ。

今夜、孃と吾が前途の世難を思ふて悲哀幽愁に不堪。

青年の年代忽ち過ぎん。戀愛の香忽ちさめん。かく思ふ時、靈の氷る心地す。悶がき苦しむ。

熱涙もて神に祈りぬ。

孃に一書を認めたり。

十六日。

夜十二時、神に祈りて曰く。

全心全力を以て爲さしめ給へ、愛さしめ給へ。

今夜バイロンのチヤイルドデハロルド中のローム(Rome)を讀み、「時」の不思議なる力に感じて涙眼にあふる。バーンスの Ae Fond kiss を讀みて泣く。

此の兩三日新體詩を得ること四五、獨歩吟、沖の小島等なり。

昨朝のぶ孃來宅。薄暮來狀、曰く發熱就床、明日來訪を望むと。今朝これを訪ひ午後五時まで居たり。

昨日午後五時頃辨三郎氏來る。收二及び尾間を伴ひて西洋料理を馳走し、新橋に送る。

「愛」と「時」と「生命」とを思ふて止まず。

一昨夜家庭雜誌の夏期附錄を書き了はる。

十七日。

午後佐々城信孃を訪ふ。今日は昨日に引きかへて發熱甚だしく、苦悶見るに忍びず。氷嚢を其の頭に加へ暫時看護す。午後四時歸社す。

歸社、歸宅の後、胸も張りさく計りに苦し。

戀は苦しきものなる哉。されど吾が心のこれに由りて深遠高調に赴くを感ず。愛の消息は音樂の消息よりも强し。悲壯なり。

わが心を苦しむものは戀のみに非ざる也。天職に對する苦悶もある也。

嗚呼幻の如き世なる哉。

苦しみ、悲しみ、もだえ、泣き、笑ふ。茫然として得る處なし。自然の無窮は靈魂悶々の無窮を示すに非ざる乎。

幻の如くに吾には見ゆ。

凡てを神の慈愛にまかせんことを願ふ。

われは未來の信念なくんば生くる能はず。

此の現今の地上の肉體の生命の活動受動は。地上ならざる肉體ならざる生命の、永久の光明に入るの源泉に非ざるならば暗夜の絕望なり。

十八日。

十九日。

二十日。

十八日九時頃のぶ孃を訪ふ。熱度減じ、たゞ床上に横臥し在りたり。薄暮まで留まりて談話したり。午食を子女等と與にす。

十九日は發熱日ゆゑ如何あらんかと案じて到り見れば、幸ひに發熱せず。午食前まで談話して歸りぬ。

薄暮再び訪ふ。本支氏歸宅して在り。藤製の臥床に吾は横になり、孃は其のふちに腰かけ、本支氏は傍らの診察寢臺にて按摩にもませつゝ、かくの如くにして九時に至りぬ。

吾等の手は幾度か堅く握ぎられたり。孃は吾がために歌ひぬ。吾はたゞ語るのみ。本支氏は頻り

に滑稽の談を投げて吾等を笑はしつ。
余が去らんとする時、本支氏は眠り居たり。
孃は庭に下りぬ。余は裏門より出でんとす。
孃は其の病餘の衰體をかゝへて送り來り、吾等二人、裏門に別れんとす。余孃を抱きて曰く、速かに全快し給へ。孃、余を抱きて答ふるに、キッスを以てす。余、門を出づ。孃、立ちて暗きかけに其の體をかすかに現はす。余かへりみて禮す、さらば。孃もまたかすかに、さらばと言へり。
余が手にバイロンあり。余はバイロンを思ひつゝ、孃との戀愛を思ひつゝ、車を驅つて家に歸りぬ。
本日は多忙にして終に訪ふ能はざりしも、心は片時も孃を忘るゝ能はず。
二十三日　朝認む。
昨朝、富永德磨氏を訪ふ。一昨夜、氏われを訪ひしもわれ不在なりし。氏が妹の事に就いて相談する處あり。上京の旅費をわれより支出し與ふる事に定めたり。
昨朝、富永　、尾間氏共に釘店なる佐々城本支氏にいたる。
余も亦診察を受く、脈九十六。心臟病の兆あり。

十時頃、信孃を訪ふ。不在。午食を彼處にてなし、假眠一番する時、孃歸り來る。孃は二回われを訪ひたり。
一昨日は殆んど終日孃の家に在りたり。午前九時より午後十時まで。別れに臨んで、庭に送りゝまた彼の裏門の傍まで！
われは孃を教導せざる可からず。孃の品性をして更らに益々高且つ偉ならしめざる可からず。
如何なる事ありとも孃を疑はざる可し。
されどわれ日夜、怪しき苦悶になやみつゝあるなり。あゝ嫉妬の魔鬼よ去れ。嫉妬は愛をして濁水ならしむるものなり。火宅たらしむる者なり。
昨日は全然われ孃を苦しめたり。口を以て舉動を以てこれを冷遇したり。あゝ可憐の少女、此のひねくれたる吾をゆるせ！　昨夜孃は例に依りて彼の裏門まで送りぬ。
されどわれ一握手だに與へずして歸りぬ。

二十六日　夜記す。
此のごろの日記は戀愛の日記なり。われは書を讀まず、文を草せず。たゞ戀愛の樂しきうちに苦

るしき時間を、朝はめさめてより夜は床に入るまで、少しの間斷もあらせず暮しつゝあるなり。

二十四日の朝(土曜日)午前九時、孃吾を訪ひぬ。坐に松本章男氏在りたり。されど氏は間もなく去りぬ。兼ねて約し置きたる郊遊を行はんとて孃は來りしなり。われ直ちに諾して、再び先きの小金井近傍の林を訪ふことに定め、車を驅りて飯田町停車場に至る。瀛車發程の時間は十一時四十分とあり。それまでに晝食を了はりぬ。

此のたびは境停車場に下車したり。彼の林まで停車場より五六丁に過ぎず。

吾等、林に入る前に梨數個を求め、これを携へて例の樂しき林間の幽路に入りたり。

孃と並びて路傍に腰かけ、梨を食ひしも、梨甘からず。止めたり。

唱歌、低語、漫歩、幽徑、古墳、野花、清風、綠光、蟬聲、樹聲。

午後三時十二分發の瀛車にて歸路につきぬ。

二十五日(昨日、日曜日)孃と同伴、一番町教會堂に出席す。歸路萱場三郎氏と三人、釘店なる佐々城本支氏の病院を訪ふ。晝飯を馳走になり。午後二時辭して三人共に吾が宅に歸りぬ。また相伴ふて四國町なる孃の宅にいたる。本支氏歸り來り、四人與に晩食を同うす。本支氏は直ちに釘

店に歸り去りぬ。三郎氏九時頃歸宅するを孃と共に送りて三田の通りに出で、三郎氏と別かれ、われは孃と共に紙屋にいたり、孃のために書翰紙を求めなどしたり。

明記し置く。それより直ちに歸宅(孃の宅に)せんと相携へて歩みぬ。夫妻の如くにして。余曰く、君は妻、吾は夫、たゞ未だ世間的にこれを公言せざるのみ。精神的に言へば失婦なりと。孃曰く、勿論なり。今夜のわが裝衣已に細君然たりと。相顧みて笑ふ。

公園に入り、ベンチに腰かけて語る。暗夜、風早く、頭上樹梢鳴り、天上雲走る。慘憺なる光景、吾等少しも頓着せず。低語、温語、二個の情人は正に戀愛の極に達しぬ。互ひに前途の難を語りて嘆息せり。流涕せり。而して爲す可き事業を數へて慷慨せり。而して相抱けり。孃は再び小兒の如くになりぬ。たゞうつら〳〵と戀の香に醉ふて殆んど正體なからんとす。

吾等は悲哀の感に打たれ、また歡喜の笑をもらしぬ。夜の更くるを恐れて公園を去り、孃を家に送りて、吾は直ちに歸宅したり。驟雨襲ひ來りぬ。風急に天暗し。

されど幸福の夜！何ぞ知らん、此の慘憺悲痛を極めたる天使は、吾等が前途のおも影なるかも。

歸宅すれば十一時半。

今日午前出社、午後四時歸宅。尾間氏來る。氏が前途の相談なり。七時半三田にゆく。孃及び本支氏と語りて歸る。歸れば九時半。

今日、新體詩一個を得たり。題は「望」。

二十九日　夜記。

二十六日の夜より三日を經過したり。

此の三日の戀愛史を記すべし。戀愛史の外に記すべき事殆んどなし。

二十七日の夜は不思議なるほど不平苦悶の夜なりき。

例の如く訪問したり。されど十分談話するを得ず。吾が心には常に萱場氏に對する嫉妬の念あり。氏が孃に對する動作の餘りにラヴ的なるに不平の血わく。皆なこれ卑しき嫉妬の炎なり。以て自からこがす也。

本支氏は所用にて歸宅せず。由て萱場氏留守居のため宿泊することゝなり、夜更けて余歸路に就くや、孃と萱場氏とは赤門まで送りぬ。

余が魂は嫉妬の毒杯をのみぬ。

昨夜(二十八日)は別に變りし事なし。朝は孃來訪せり。樂しく語り、熱きキッスを以て別れぬ。

昨夜佐々城を出して、萱場と二人、芝公園の山に入り、ベンチに腰かけて大に北海道自立策を語りぬ。

今朝早く孃を訪ひ、公園に導き、大に將來を談ず。第一、孃は米國行を止めよ。第二、二人北海道に立脚の地を作らん。第三、しばらく東京に勉學せよ。第四、勉學の方針は余に一任せよ。

孃悉く諾したり。吾等は樂しく別かれぬ。

今夜、孃頗る沈思に陷りたる樣子なりし。

明朝其の理由をきく可し。

ア、不思議の世界に不思議の命。

何をあくせくとなすぞ。

嗚呼吾が精神をして更らに高尚ならしめよ。更らに深遠ならしめよ。

二十八年九月

八日　朝認む。

八月三十一日より今日に至るまで、過ぐる九日間に於て、わが生涯の方向は全く一變せり。

北海道行を決したるは三十一日なり。

以後引き續きて種々の事起りぬ。信子孃が萱場氏に對つて、われと信子孃との關係を公言して氏の希望を斥けたるも此の間なり。

信子孃が幽愁悲哀に陷り、離別の苦に泣き暮したるも此の時代なり。

遠藤きよ孃が常に信子孃とわれとの戀愛に同情して、一方に信子孃を慰め、一方にわれと信子孃と相逢ふもなほ人目を引かざらしめたるも此の間の事なり。

われと信孃と終夜語り明したるも此の間の事なり。

北海道拓殖の事に付き參謀者たることを承諾し、萱場氏自らも吾等のラウを同情視したるも此の間の事なり。

われ收二にわがラヴを公言したるも此の間の事なり。

德富氏に公言したるも、竹越氏に公言したるも此の間なり。

月明に乘じ深更に至るまで、佐々城氏の庭園に信子孃及び遠藤きよ孃と共に、柳樹蔭に籐臥床を置きて談笑したるも此の間の事なり。

德富氏はバイロン詩集を送りぬ。

社中は不思議の思ひをなせり。

鹽原行（信孃）の計畫も此の間になりぬ。

孃は殆んど悲痛の樣、傍らに見る目も哀れなるに至りぬ。人なければ泣くのみといふ。

六日午後、豐壽夫人を上野に迎へたり。

豐壽夫人の歸京はわれ等親話の自由を奪ひぬ。

孃よ。此の普通をはなれたる青年に全心の愛を捧げたるは不幸なる哉。孃よ。吾を許せ、あゝ吾を許せ。

嗚呼神よ。此の足らざる吾をも全心を以て愛する可憐の少女を常に守り給へ。
更らに祈る、吾等二人の望、喜、光、は互ひの愛なり。益々清く且つ高く、且つ堅固ならしめ給
へ。

十日。

靜に此の一身を顧みれば實に責任の重きを知るなり。
人生は眞面目なり。
神は吾に豫言者の火を求む。
わが愛は自由を求む。
われに全身の愛を捧げたる少女あり。
われ北海風雪のうちに沒せんと欲す。
われの後に父母一族あり。
われの傍にわれを賴む青年あり。
一身の生死失落存亡は恐るゝ處に非ず。あゝ神よ。われをして世人のために、此の國の爲めに、
此の世の爲めに、此の五十年を費さしめよ。土地を得て何かせん。

富を得て何かせん。此の地球上の生命は唯々靈の修練のみ。

昨夕德富氏に晩食の饗應あり。夜半まで語り、氏わが性質を說きて大に戒むる所ありたり。氏は
余にフランクリン的教訓を與へたるなり。處世成功を數へたるなり。

今日午前段清吉氏を訪ひ北海拓殖の事をたゞす。德富君及び收二、三人にて丸木に寫眞を撮る。
晝飯の饗應を佐々城にて受く。
昨日約したるなり。夜、段清吉氏を伴うて、上村昌義氏を訪ふ。氏は北海道に於ける事業家の一
人なり。

昨日內村鑑三氏より親切なる書狀ありたり。
昨日伴諒輔氏より武雄君の片身として浴衣地一反送り來る。

十二日。

午後五時半筆を採る。

われ今鹽原溫泉、古町の一旅館の樓上にあり。

昨日午後五時信孃を送りて上野停車場にあり。停車場にて、遠藤きよ孃と合ひ、二孃が鹽原に行くを送りぬ。

午前今井忠治君來宅、尾間明氏來宅、收二と四人牛を煮て食ふ。午後收二をして菅原佐々城兩氏を訪問して紹介狀を受取らしむ。

佐々城夫人不在。

田村三治氏來宅、宮崎八百吉氏來宅、萱場氏來宅。

十三日。

昨日執筆の續き。

夜、(十一日) 佐々城夫人を訪問して紹介狀を受け取る可き筈の處、以上の來客の爲め果さず。

昨日(十二日)午前、收二及び尾間氏に送られて上野停車場に到り、六時半發の汽車にて發す。

那須停車場より車にて鹽原に向ひぬ。鹽原は古町會津屋なり。

來た古町に達せざる半里計りの處にて、信孃に遇ふ。

車を下り、信孃と共に歩みぬ。吾等の位置の容易ならざる事を語り、大に覺悟して決して惑はず、益々高潔深切を期し、一には潮處子君等をして吾等のあとを追はしめ、一には世の瞻仰する處となる可きを言ふ。互に感澤して涙をのみぬ。

會津屋に着し、夜半語りて盡きず。前途を語り、人道を談じ、遂にきよ孃、信孃と三人、聲を呑んで哭するに至りぬ。

佐々城氏突然來り、遂に吾等が今日までの愛史を打ち明けて語らざるを得ざるに至りぬ。

われはありのまゝに語れり。

豐壽夫人より信孃のもとに一書飛來せり。

吾讀んで思はず寸斷したり。あまりに吾等を邪推して殆んど人を誤解するの極、吾が面上三斗の泥を塗られたるの感あり。

憤激描く能はず。本支氏外出の後、痛哭す。

二孃の交々慰むるによりて僅に怒情を抑ふるを得たり。

本支氏は吾が凡てを聞きて夫人と相談して後に決答すべしと答へたり。

われ豐壽夫人と相談する爲めに一先づ東京に引き回へす事に定めたり。

今朝二孃と共に散歩して源三位洞窟及び八幡宮に詣でぬ。憂愁痛憤、一變して奮激、決鬪、希望、光明の感にみたされたり。

何故に一個の天が生みたるソールと他の一個との高尚深切なる愛の交換は、第三者をしてかくまでに干渉せしむるに至るぞ。

誤解邪推は光明正大の敵なり。

愛史は常に秘史なり。故に常に哀史となる。

十五日。

夜認む。

昨朝(十四日)本支氏、信子孃及び余を呼びて人なき處に至り、曰く、吾等二人の愛の約束はこれを承認す。

元來を云へば、豐壽氏こそ信孃の母ゆゑ、十分此の事には權力ある人なれども、若し四人車を並べて歸京歸宅せば自然と人目を惹き、かくては人の口もうるさき故、今本支自から母の權をも代

表し、責任を帶びて此の事を認定す云々。

故に豐壽氏若し苦情を鳴らさば責は本支氏に在るなり。

吾等二人の喜び如何。直ちに本支氏に對つて、感謝したり。

本支氏は午後二時過ぎ發の汽車にて歸京するとて午前十時會津屋を出發したり。

本支氏は余をして猶滯在せしめたり。

午後三時より信子孃と共に散歩に出掛けたり。遠藤きよ孃は氣分惡しとて留守居せり。吾等二人手を携へて源三位洞窟の茶屋を訪ひ、其れより尚ほ溪流を泝りて橋を渡り、淋しき谷に至りて止む。秋晴幽谷、夕陽滿山、人影絶寞、此の時此の境に愛戀の二人相携へて朝の歡喜を胸にたゝみつゝ歩む。何の不足する處ぞ。一生のパラダイスなり。

今日午後三時少しく前より三人相携へて散歩す。此の度は谷を上りて更に橋きに到る。眼下夕陽山村に滿ちたり。靜景幽景。カーム、エンド、フリー。行く〳〵秋草花を集む。

信子、きよ子二孃は野花を以て頭髪に挿しぬ。

十八日。

夜。

吾今北海道室蘭港の宿樓にあり。

十六日午後三時會津屋を出發せり。離別の悲哀、涙をしぼりぬ。信子孃の悲嘆見るに堪へず。信子孃よき子孃送りて福渡の先まで來りぬ。

われ強いて去らしめ車にのぼりぬ。孃等泣く。吾亦車上にハンケチをぬらしぬ。

顧みれば二孃立ち止まりて手巾を振りつゝあり。山をめぐりて遂に見えずなりぬ。

那須停車場に午後七時二十分乘車。青森には、十七日午後四時到着せり。

十六日の夜發熱し、二孃水をくみ來りて、頭及び喉頭を冷やし呉る。

十七日夜汽車中にて發熱せずやと心配したれども案外に安眠するを得たり。十七日終日、東北の野を窓外に望んで馳す。野馬の夕陽に立つなど吾が眼には珍らし。

青森にて中島屋に投じ、午後十時出帆、函館に向ふ。睡眠の中、函館に着す。吾が眼はじめて北海道を見たり。午前八時出帆、室蘭に向ふ。途中波高し。午後三時半室蘭に安着せり。丸一に投じぬ。

青森より一通、玆より一通、信孃に發書。

收二に一通玆より發書す。

幽愁、憤激、無念の涙、離別の涙、希望の光、絶望の面影、人生不思議の幽懐、わが胸に往來せり。

細雨霏々、夜寂寥。

二十日。

嗚呼吾少しも信孃を忘るゝ能はず。

十九日……午後四時札幌に安着したるが故に五時東京に向けて安着の發電をなし、且つ母の心如何と問ひ合せたり。其の夜、答なし。今日終に返電なし。餘りの事に思ひ豐壽氏夫人に問ひて信子孃鹽原より歸りしか、直に返事を賴むてふ電報を發したり。時に午後四時、而して今は九時半、尚ほ返電なし。

信孃來りて吾をたすけ、共に小屋に入りて開拓に從事する事に就きては、定めて彼の女の兩親の苦情多かるべしと信ず。信孃は必ず能く之を打破するを疑はず。

昨夜信孃、きよ孃、及び收二に書狀を認む。

今朝新渡戸稻造氏を問ふ。未だ充分意氣相投ずるに到らず。明日また訪問せん。

新渡戸氏も同道して農學校に行き、其書籍館に於て舊知里田(今高岡)氏に紹介せらる。
此の舊知には菅原三郎氏よりも紹介ありたるなり。
今日又吉澤氏と面會す。吉澤氏と相談の上にて略々今後運動の方針を定めたり。
今夜、信嬢、收二、萱場氏に書狀を認めたり。
今日薄暮實に人生の悲哀を感じたり。人間は何の故にかくまで齷齪たらざる可らざる乎。何故にかく苦心經營せざる可らざる乎。
何の目的ぞや。何の必要ぞや。何の爲めぞや。
今やわれ、語る可き親友なく、遠く戀人を思ふて相見る能はず。孤影落寞として天の一角にあり。
且つ苦心慘憺の事に從事す。
人の深き靈を有するもの、たれか此の生の何の意義たるかに思ひ及ばざるものあらむや。
されど吾、神の愛、永生の信仰、哲人の生涯などを思ふて無限の悲愁を追拂ひたり。

二十一日　朝

ヒロイックなれ。無益の愁に苦しむ勿れ。
將に北海道に於てなす可き事をつとめよ。信子は今如何にしてある乎。其の母と衝突して苦みつゝあらざる乎。或は病重くなりしに非るか。尙ほ鹽原に在る乎。母の心解けざるが爲めに發電せざる乎。吾が一寸歸京し居ることを望み居らざる乎。
わが父母は今吾が北行に就て大に悲みつゝはあらざる乎。其のため更に老衰を加へざる乎。
凡てかくの如き心配悲愁、吾が心をして鉛の如く重からしむ。
されどヒロイックなれ。頭上神の愛護あり。凡て神にまかし爾は爾の事に從事せよ。

二十五日。
今朝より空知川沿岸に向つて土地撰定のため出發せんとす。
二十一日の午後新渡戸君を訪ひぬ。夜氏よりの紹介狀を携へて白仁武氏を訪ひぬ。
其の夜熱涙感慨禁ずる能はず。信子嬢に一書を出す。
二十二日。
日曜日、朝吉澤氏を訪ひて土地撰定の事に就き相談する處あり。直に會堂に出席す。信太氏の說教あり、「われ生く」の題にてクリストの性格の人情自然なるを說く。
午後吉澤君と共に散步す。夜高岡氏を訪ひ十一時頃まで談話し、歸宅後通信文を草す。

此の日。正午、信子孃に一書を出す。

二十三日　朝。

信子孃より電報來る。「父の手紙讀みて、われのが着くまで返事よこすな」。われ甚だ心配せり。

高岡氏と共に小川次郎氏を訪ふ。歸路製糖會社を見物す。またわれ一人新渡戸氏を訪ふ。晝飯を馳走せらる。書籍を借り歸る。リンコルン傳、キツドのソレアル・エヴオリユーション、トルストイのライフ。

夜内田潔氏來訪あり。氏は内田正敏氏の弟なり。

氏去りたる後、禁煙會に至る。信子孃に一書を草す。

二十四日、朝、道廳に出頭す。白仁氏に面談の結果、空知川河岸に出張することに定まる。道廳より歸るや、直ちに小川氏を訪ふて相談する處あり。直ちに吉澤氏を訪ふ。吉澤氏在らず。信太氏を問ふ。午後高岡氏來訪、共に吉澤氏を問ふ。氏と相談の上にて一人出張することに決す。歸路新聞社に安部氏を問ふ。

リンコルンを讀みて夜に至る。

夜、信孃及び本支君より來狀ある可しと思ひしに來らず。芳賀及び依田の二青年來訪。信子孃に

一書を草す。

人生茫々、行路難し。わが性格の一歩々々進歩するを覺ゆ。

願書を差出したる上にて、一先づ歸京し、大に相談する處ある可きに決す。

二十九日　安息日。

函館港旅館に於て認む。

我が生涯は愈々多端になりたり。

二十五日朝空知太に向つて發したり。空知太に於て雨中の北海道森林を見たり。三浦屋に於けるわが心緒亂れて糸の如く、苦悶措く能はざりき。心を轉じて殖民小屋のうちに住む他の憐れなる同胞の上に思ひ及びし時、主我的幽愁は忽然として晴れ、同情の哀感油然として起りぬ。

空知太よりは空知川沿岸に出づるに不便なるが故に、歌志内に回行したり。

歌志内旅舍に於て、篠原熊夫氏と稱する御料局の官吏に遇ひ、此の人に井口某等の所在を聞知し、

其の夜は一泊したり。信子孃に一書を出しぬ。

二十六日は午前七時頃より宿の少年一人を連れて、空知川河岸に出立したり。路一山を越ゆ。行程一里強の山中の幽邃なる、紅葉の火を點じたる、皆な北海道の美なり。空知川沿岸に離なく出でたり。

離なく井口某等に遇ひたり。土地選定を爲したり。

彼等は移住民の小屋に居たり。三間と四間位の小屋にして極めて粗造なる者なり。われつら〳〵内部を見たり。實にこれ立派の者なり。以て献身者の住家たるに足る。以て讀書と沈思と祈禱とに足る。以て筆を取るに足る。代價を聞くに、曰く、一坪一圓ならば可なりの小屋を造り得べしと。

寂寞たる森林實にわれを動かしたり。

午後二時頃歌志内に歸りぬ。其の夜また信子孃に一書を出したり。

其の夜獨り散歩す。鐵道線路にそひて歩む。

月、山の端より出でたり。

(眞理の追求)。

瞑想沈思する多時、仰いでは無限の大空に對し、天地の不思議を思ひ、顧みて吾が今日の境遇を

思ひ、決然として覺悟する所あり。眞理の研究、眞理の紹介、これ吾が天職なり。眞一文字に此の天職に從事すべしと思ひ定めぬ。

十萬坪を借金して開拓せず、一戸分若しくは二戸分を自作することに思ひ定めたり。

眞理の研究、眞理の傳播、これ吾が天職なり。風吹かば吹け、雨降らば降れ。政治家をして華麗なる舞臺に舞はしめよ。文學者をして、大家連の虚榮を追はしめよ。吾はたゞ此の天職に眞一文字に進まんのみ。今日まで、多くの誘惑來りぬ。吾が薄弱なる、常に眞誠なる能はざりき。

嗚呼わが天職定まれり。神の眞理。これ吾が命なり。

信子にして己に吾と一體たる以上は、また此の天職を等ふせしめざる可らず。

吾等一體の愛の結果を此の天職のためにさゝげざる可らず。

人生幾何かある。迷妄の中に一日を送らしむる勿れ。切に光を求めしめよ。

二十七日午前十一時、札幌に歸宿す。本支氏、きよ孃及び收二より書狀來り居たり。

豐壽夫人の吾等二人に對する怒は非常なりき。夫人は全く其の平心を失ひたり。半ば狂氣したり。

信子に自殺を進めたりと云ふ。

われ之を聞いて驚かず。彼の女は感情の子なればなり。

本支氏及びきよ孃、收二の手紙皆信子の亞米利加行を語る。
吾全然不贊成なり。吾は信子の夫として之を許さず。且つ吾等一體の天職に對し、斷じて此の事あるを得べからず。
其の夜信子孃の來書あり。
全然これ彼の女の理性を失ひたる文字なり。彼の女は自殺を企てたりと云へり。其の書遺きを送りぬ。亞米利加に行くに決せりと云へり。よし、信子をして決心せしめよ。これ全然理性を失ひたる決心なる故、吾之を許さず。
吾は直ちに歸京すべきに決したり。
二十八日朝七時二十五分、札幌を出發す。
汽車中、讀書と、瞑想とうたゝねとのみ。
トルストイのライフを携へて。
豐壽夫人、及び信子孃に告ぐ可き事を一々思ひ出すまゝこれを手帳に書きとめ置きぬ。
何故に吾等一體は北海道にて開拓せんとの決心をなせしか。
何故に信子孃の亞米利加行は、吾等一體が斷じて贊同せざる所なるか。わがこれに對する意見を

開陳せんがために、信子孃の苦悶を救はん爲めに。吾が一生の大事を決せん爲めに。成るも、破るゝも。

十月

二日。
麴町區富士見町なる吾が宅に於て認む。
一言一行、一擧手一投足の間に於てすら、習慣先入の薄弱、虛榮、不義、我慾は其の墮力的運動を起さんとす。己に其の運動を始むる時は、容易に停止することなし。
故に決して輕々しく言動すること勿れ。これまた修練工夫を要する一事にぞある。

三日。
吾が戀愛の前途は殆んど暗黑なり。されど吾等は貫かずんば已まじ。吾は如何なる事あるとも此

爾、深く吾等の愛の意味を思へ。戀愛の意義を求めよ。

の戀愛は貫かずんば止まざる可し。
最後まで戰へ。根氣の續く限り戰へ。昨夜本支氏を釘店に訪ひぬ。されど彼は全然余を解せざるなり。余を知らざるなり。
昨日午前信子孃ときよ孃來宅す。信子孃は米國行を主張せり。されど吾、全然之を排したり。

吾ば暗迷をたどりつゝあるなり。
吾が心裡に信仰の光あるなし。吾が前途に希望なし。吾に薄弱あるのみ。
吾は凡てをさて措き、光を求めざる可らず。
薄弱に打ち勝たざる可らず。希望を求めざる可らず。
吾をして信子孃を愛することを益々深からしめよ。
父母を愛すること、弟を愛すること、友を愛することを益々深からしめよ。目下の吾には自然は死してあるなり。神は無意義なり。吾を知らず。人を見ず。たゞ暗黑あるのみ。
嗚呼神よ！　涙を以て祈る、感激して祈る。希くば吾が心に光をそゝぎ給へ。吾は弱し。吾は暗し。救ひ給へ。

人生竟に何の意義ぞや。暗迷をたどる盲者の行列、これ人間の世界か。暗迷其の裡に光を含むか。
不可思議なる天地。不思議なる人生。吾が雲は暗し。
かゝやく秋の日も晴れし蒼天の深き色も今は吾に何の力もなし。吾が心はにぶりはてたり。吾が精神は疲れ果てたり。吾は人のうち尤も愚なるもの、悪しきもの、弱き者なるが如くわれに見ゆ。
天も地も友も戀人も、われを捨てわれをあざける如く見ゆ。
吾が心は愛の一點の光もなきなり。
さりとて、吾が心に他を愛するの念もなきなり。主我的精力もなきなり。吾はたゞ空となりたるが如し。吾は空也。
此の地上はたしかに樂地に非ず。罪悪と慘事との充滿する處なり。
余は今、現代の政治につきても、文學宗教に就ても何の趣味もなし。道路を行くも何者も吾が注意も趣味も之を惹起することなし。
凡ての者、吾には無意義、無趣味なり。
凡て夢中にあるが如し。否な、夢の方寧ろ趣味あるを覺ゆ。
七日。

三日四日五日六日、忽ち數日を經たり。

吾等一體の事容易に落着せず。母氏豐壽は依然として頑固たり。

德富君に依賴したり。未だ其の確なる見込を聞かず。

本支君に訴へたり。彼は流涕せり。去れど未だ母氏の心を解く程に盡力し呉れず。

遠藤きよ孃の母氏及び娣氏、吾等に非常の同情を表し、吾等の爲めに盡力するに約しぬ。

八日。

朝、昨夜收二に托して德富君より來狀あり。

今にして、思ひ切らずんば男を下げる云々。

想ふに豐壽氏はあくまで我を誤解し居るが如し。

彼の女は誤解、不情、頑固、虚榮より出づる決心を以て吾等に當る。願くば吾等をして、高潔なる戀愛、男女の信義、一生の體面より生ずる決心を以てこれに當らしめよ。

事若し全く破裂に了らば如何にす可きぞ。

兒よ天高く地廣し。爾の心靈は偉大なり。爾の天職は重し。應に忍苦精勵すべし。

世と絶ち友と絶ち、苦學修練せんのみ。

天われを召す。

昨夜富永氏等來宅。其の妹來京。

吾等諸友相協力して天職を盡すべしと語りぬ。

今やわれ、諸々の感情亂れ起る。

豐壽氏に對する、遺恨憤怒、復讐的惡感。信子孃に對する深甚なる戀愛の哀情。

天職に對する熱心なる奮激の情。

されど此の際、われは、

一個の男子として、

一個の天職ある男子として、

一個の熱情あり、誠實ある男子として、

一個の信義あり、同情ある男子として、
一個の寛大にして溫和なる男子として、
一個、深き心靈の宿る男子として、
一個の眞なる戀人として、
一個、孝なる子として、
一個、信愛なる友として、
此の事を處置するの覺悟あり。

三浦逸平氏に凡てを依賴したり。

爾めさめよ。
夜將に十時。獨り一室に在り。心眼明らかに中にひらく。自から顧みて、此の一身一心を思ふ。
人生これ何ぞや。これわが心より起る自然の問なり。
われこれ何者ぞや。天地何者ぞ。

我が生これ何ぞ。わが友の死これ何ぞ。自殺何故に惡しきや。
不可思議なる天地に於ける不可思議なる人生。
惡とは何ぞ。善とは何ぞ。
人は皆な、自己を中心として其の慾望を追求しつゝあり。人は其の形骸を失ひて土中に沒しつゝあり。世間とは慾望の交通所なり。
愛何者ぞ。嗚呼愛！ これ靈の聲に非ずや。靈とは何ぞ。
嗚呼爾めさめよ。深き思に入れ。人生の不思議を感ぜず、
天地の不思議を感ぜよ。
靈の覺醒を求め、眞理を熱心に求め、信仰の火を天より得よ。

十日。

昨日(九日)午後一時頃、信子孃より來狀あり。
其の意は吾等の愛、ただ吾等一體の互の信愛をのみ賴みとすべし。決して他の同情に依賴すべからずとなり。且つ曰く、今日の場合、北米行を許せ、となり。
此の手紙を讀みてわれは殆んど絶望したり。

斷然彼の女と絶つ可きかと思ひぬ。絶望的書狀を認めたり。されど遂に投函するに及ばずして止みぬ。

わが此の時の苦悶は一生忘れ難かる可し。脈々の血管に毒を注入せられて一種の苦液全身を環流するが如きを感じぬ。胸はりさく計りに苦しとは實に此の時に於て最も痛切に感じたり。楣間に掲げある「少女」の畫像を見れば、今日までなつかしく見えし此の似顔は却てわれに苦しみを覺へしめ、富士見小學校にて歌ふ小兒の唱歌は樂しかりし記臆を呼び起して殆んど吾をして堪ふる能はざらしめたり。何とかして心を他に轉じて此の苦悶より脫却せんと思へども少しも其の物なく、夕飯を急ぎて食ひしも其の味少しもなし。ただ二階を上り且つ下り、苦悶に苦悶を重ね、熱涙絶え間なく流れ、無念さ、殘念さ、悲しさ、もろもろのにがき感情あふれ出でたり。

かくする中、萱場氏來宅あり。大に慰樂するを得たり。

忽ちまた竹越君來り、われを伴ひて外出す。萱場氏にはしばし待たれよと賴み置き出でたり。

竹越氏は頻りに思ひ切れと迫りぬ。其の理由は種々あれども要するに下の如し。

豐壽夫人は無類の剛性者なる故にこれと最後まで爭ふ時は非常の事を起すに至る。

第二信子には已に汐田との約束あり。

第三よし二人の思ふ通りに實行するを得るとするも到底滿足は得難し。

第四余一生の浮沈に關す。

大凡右の如し。これを以つて吾等の愛を破るに足らざるなり。要するに竹越君等の思ひ切れといふは今日直ちに結婚することに就ての不利不便より出でたる理由なり。

竹越君と別れ歸宅して大に萱場氏と相談したり。萱場氏は飽くまで强剛に行けとの說なり。

余獨り夜半まで考へたり。信孃に書狀を認めたり。遂に下の意の如くに決しぬ。

吾等の愛はタイムとスペースと事情とのために破るゝものに非ず。就ては此の際、吾は北海道に去らむ。信子は北米に行け。而して玆兩三年時機の來るをまたん。

時機來らずんば十年二十年また一生。結婚せずとも宜し。唯吾等の愛の約束は斷じて取り消さず。よつて竹越氏には下の如く答へ置きたり。思ひ切るとか、切らぬとか言ふ事は吾等の間に用ふる能はざる言葉なり。此の際余一人犧牲となりて北海に去りなば後では宜しき樣に納まらむ。

兎も角も信子及び世の中が、凡て結婚を不利なりと難ずるならば、血を呑みて默するの外これなし云々。

今朝萱場氏を麻布に訪ひ、信子孃へ昨夜認めたる書狀の傳送を依賴したり。萱場氏を午後一時前

に去り、かぶと町の三浦逸平氏を訪ひたり。而して佐々城に對する運動の中止を求めたり。
歸宅後父に決心を語りぬ。父は涙を流して北海道行の中止を求め給ひぬ。われも泣きたり。收二
歸宅後此の事を語りぬ。收二また泣きぬ。われは戀愛と、友義との中間に立つなり。

十九日。

情は美の極處に動く。されど時に自家の姿を顧みて自から誇るの醜體を現はす。意志は然らず。
深く達せず、されど強く行く。凡ての幻影を打ち破りて進む。情は蒸氣なり。力なり。意志は機
關なり。之を通じて始めて情に力あるなり。情の猛烈を憂へず。機關の薄弱を懼る。意志のみを
力なりといふは誤謬なり。

二十八日。

事は樣々に變轉したり。
民友社の小冊子を書き、以て衣食することに定まりたり。
少年傳記叢書と題す。德富氏と數回の相談を遂げたる結果なり。
佐々城信子は父母の虐待を受けて三浦氏に投じたり。三浦氏より數回の談判を佐々氏に試みたれ
ども事成らず。信子尙ほ三浦氏にあり。萱場三郎氏を吉見家の養子となすために、多少の盡力を

試みつゝあり。萱場氏また吾等二人のために盡力しつゝあり。
信子孃斷然吾が家に來り投ずるの外、策なし。
人生は戰爭なし。
戰を宣告したる上は、書に向つては書を征服し、人に向つては人を征服し、事業に向つては事業
を征服するまでは止む可からず。
何物、何事、何人に對しても討死の覺悟を以て戰ふ可し。死するとも勝つの覺悟あれ。
以上は吾が始めて心から決定したる立身の法なり。
信子を救ふの精神を以て信子を愛すべし。
決して信子より受くるの念を抱かざるべし。

天地と人界、吾今にして漸く、天地の外、人界あるを知り、人界の外、天地あるを知らむとす。
われ、天地の間に介立し、われまた人界の裡に處身す。
天地と人界と吾と、其のうちに限りなき神秘を藏す。宗教の眞理とは此の三者の調和なり。而し
てわれ未だ神の信仰薄弱なるが故に、此の大調和あらず。

嗚呼此の不思議なる天地に對して、われ吾が心靈を認めざるを得ず。而かも人界に在りては常の肉の慾望に苦まんとす。

目さむるごとに其の身を天地の間に見出す者は幸なる哉。されどわれは忽然睡眠よりさむる時、氷の如く響き來るものは人界の雜響にして、身は忽ちまた紛々たる慾望、主我競爭の中に投げ込まれ、あゝ復終日鞭聲を聞かざるを得ざるかと感ず。

嗚呼、不思議なる天地に於ける不思議の人界。

哲人、詩聖、豫言者は自己を以て天地と人界の不思議を調和せんと試みたり。自己を天地の間、人界の中央に見出したり。地の豪傑は人界に於て勝利を誇りぬ。されど、遂に自己を此の不思議なる天地其の者の間に認め得ざりき。其の眼は人界の太陽を觀て遂に天地の太陽をみざりき。哲人は稍もすれば人界に於て最小の者なりき。

われ人界に於て人界的願望の達し難きを感じて、悵然として立つ時、忽然頭上の月を瞻仰し、忽然吾が身體の永劫不朽なる天地に存するを感じ來れば一種限りなき悲哀のうち、一種言ふ可らざる自由を感ず。此の自由は飲んで盡くる事なき希望の泉を豫想せしむ。

人は曰く、天地の間に在りては人間の渺乎たる一小粟の如きを感ずと。吾に在りては然らず、われは人界に在りては殘念乍ら、いと小き未だ何等自得の偉大を感じ得ず、自然一身の孤立を覺ゆれども、眼を轉じて天地に對する時、實に心靈の底より聲あり。われは無窮の天地に實存すと。

十一月

三日　天長節、日曜日、雨天。

來訪者、今井忠治、富永德麿兩氏。

昨日來訪者、丹野直信。

一昨日來訪者、萱場三郎。

三十一日、信子孃來宅滯在。夜きょ子孃の來宅。

信孃の消息を見舞ふ。泣く。

丹野氏の來訪は信子に關して相談する處ありしなり。

西國立志編を讀みつゝあり。

八日。

今朝德富氏を訪ひ、左の書を得たり。

一、信子等謝罪書に由り豫て御申入に相成候結婚之儀は識認致候事。
一、同人等少なくとも一兩年間は府下を立退き候樣御談被下度候也。
一、父母弟妹間の音信並面會は拒絶致し候事。右本人等に御談被下度候也。

明治二十八年七月

佐々城豐壽
佐々城本支

德富猪一郎殿

右の書を得たるまでの次第を左に錄す。

四日の夜、潮田ちせ子老姉、丹野直信氏の二氏來宅ありて、大に勸告する處あり。潮田老姉の曰く、佐々城にては遂に此の度の件を一任する由公言せられたり。就ては御身達も小老に凡てを一任せよ。然らば兎も角も目出度結婚せしめむ。其の間信子は丹野若くは潮田に寄宿すべし云々。

吾これを排して受けず。曰く、御依賴申して、一任致したけれども、愈々如何にして結婚せしむてふ條件を知らし給ふに非ずんば信子をして去らしめ難し云々。相談まとまらずして二氏去る。

六日朝德富氏を訪ふ。最後の談判を佐々城氏に試み、自から媒酌人となりて目出度く成就せしめやらんと申さる。依賴し歸り、佐々城氏へのわび書及德富氏への依賴書二通を德富氏に送り置きたり。

今日遂に成就す。

高岡氏より來狀あり。返書を出し置く。

昨夜吉見氏に書狀を發す。萱場氏の事なり。

一昨日西國立志編を讀み了る。

昨日　物語を讀み了る。

十一日。

午後七時信子孃と結婚す。

わが戀愛は遂に勝ちたり。

われは遂に信子を得たり。

植村正久氏の司式の下に、德富君の媒介の下に、竹越與三郎君の保證の下に、潮田ちせ老婦の世話の下に、吾が宅に於て、父及弟列席の上、目出度く結婚の式を擧げたり。

二十一日。

十九日、信子と共に逗子に幽居す。以後記する處は幽居の日記及び感想なり。

十九日の朝、德富猪一郎氏より相談あれば來れとの葉書到着せしかば直ちに訪問したり。氏は吾を諭すに、佐々城豐壽夫人及び潮田ちせ老婦に對する態度の更らに親密なるべきを以てせり。且つ曰く、事は爲すは難し。將に眞面目に確實ならざるべからず云々。吾感激する處ありたり。

德富猪一郎氏を辭して歸宅するや信子と共に潮田夫人を訪問したり。三浦氏の事、きよ嬢の事を聞きぬ。潮田を辭して直ちに新橋停車場に赴き、收二及尾間氏の盡力にて首尾能く乘り遲れもせずして乘車するを得たり。

天曇り空氣沈靜の日なりき。横濱停車場に着したる頃は細雨來りぬれど大船にては止みたり。逗子停車場に柳屋の主人ありき。柳屋とは幽居のため其の一室を借り受けたる農家なり。今年夏、德富家の借室したるも同家なり。

薄暮信子と共に葉山に至り、厨具を買ひ求めて歸宅す。天曇り風暗し。風濤の音、終夜枕頭に響きぬ。

二十日、午後信子と共に鎌倉なる星野良子孃を訪問せり。孃は信子の從姉なり。明治女學校に今夏

入校したれど、もと横濱女學校の學生なり。病を養ふて鎌倉なる星野天知氏の別業にあり。別業を辭して門を出づれば朧ろなる三ヶ月山の端にかゝりぬ。遠近の暮煙何となく哀れをこめたり。

今日朝まだきより降雨。

熱心、大膽、忍耐。

二十二日。

何故に爾は、何故に爾は、此の生命の不可思議を忘れむとはするか。

何故に爾は神の現存を藐忽にせんとはするか。

何故に爾は眞面目、眞實、確固、剛毅ならざるか。

薄弱は悲慘の極なり。剛毅の德は人間の第一なり。

二十五日。

月光、海波、富岳、紅葉、朝夕の眺め今や吾を四圍す。

祈禱を以て朝の業をはじめ祈禱を以て了はる。

神より下る神聖なる使命を待つて而して後ち起つを願ふなり。

大膽、熱心、勉勵、剛毅、忍耐の德を養ふ。

吾大企圖あり。嗚呼われに大企圖あるなり。

思ひ煩ふ事勿れ。唯々心を誠にして神に求め且つ力を瘁してこれを爲せ。爾の靈をして外物の壓迫を感ぜしむる勿れ。

月明と星彩と海岸と富士山と爾の靈境を崇高ならしめ、爾の天地に對する誠意をして更らに深からしむ。

つとめてこれを求めよ。忍びてこれを爲せ。自然の美と雖も怠慢者には其の深光を示さざるなり。

十二月

三日。

日本國民の體軀中に流るゝ最高潔の鮮血の泉を一池に集むるの太溝渠を掘る者は誰ぞや。

四日。

久しぶりにて筆執り得るを樂しく思ふなり。日々の讀書は、書狀書く時をすら容易に得がたく此

の記は尙更ら緣遠くなり行きぬ。されど今夜は雨降りて靜かに、讀書に倦みて閑を得たれば少しく記する處あるべし。

先月十九日の幽居以來已に半月を經過したり。吾等が生活は極めて質素なれども極めて樂しく暮しつゝあるなり。質素は吾等の理想にして其の實效は儉約と時間の經濟となり。

米五合に甘藷を加へて一日兩人の糧となす。豆の外に用ふべき野菜少なし。時々魚肉を用ふれども二錢若しくは一錢七りんの「あじ」「めばる」「さば」の如き小魚二尾を許すのみ。粗食といふをやめよ。粗食は美食よりも人を弱くするの實、極めて少なきなり。菜食の利は腦髓の明快にありと始めて知りぬ。

讀書やゝ進みたり。高木のピット、竹越のクロンウエル、敎界十傑、等讀了。今はフランクリンの自叙傳を讀みつゝあり。已に其過半を終へたり。「フランクリンの少壯時代」と題し、彼の立身の歷史のみを著はし、以て傳記叢書の第一卷となすの豫定なり。

內村鑑三君より來狀あり。曰く、フランクリンは常識（コンモンセンス）の使徒なりと。實に然る可く見ゆ。日本には類の稀なる人物也。

土曜日（三十日）の午後收二東京より來る。日曜日の朝。相携へて鎌倉に遊び歸りて逗子の停車場

に下車せし時(午前十一時半)今井忠治氏の東京より來訪するに逢ひたり。共に國居にかへりぬ。午後三人共に海岸を沿ふて葉山に至る。此日天氣晴朗晩秋の氣透徹にして和適、富士山雪を戴きて相模灣の彼方に聳え、大磯國府津小田原の海岸、微湛の中に隱見し、鎌倉の家屋點々指す可くあかぬ眺めに飽かぬ散歩を得たりき。伊豆連山の彼方に沈む太陽を「あぶずり」の崖上に望み地球の自轉を沈む太陽に見たり。

夜は明月、連夜なり。

昨夜九時半過ぎ獨り海濱に出でぬ。玆は御最後川の海に入る口、潮遠く退き去りて跡に海底の岩を現はすが龍の如くに横たはるを見たり。吾其の上に立ちたる時、月天上に在りて寂寞逗子を罩め、波の音濱にかすかに響き、月影水底に玉を沈め、俯仰して立つ吾を直ちに天地介立の清想哀感に誘ひたり。

吾が勝つ可きの敵は何ぞと吾反省せり。

曰く無學、これなり。曰く忍耐の足らざる事是なり。

自ら思ふ。信仰は最初なり。信仰の最初は自然を自然として其の不思議中に吾を不可思議のものとして見出す事なり。

人間社會を見る前に天地を見る事なり。人を見る前に神を見る事なり。事業を見る前に信仰見る事なり。先づ吾が血に消えざる火を加ふる事なり。

これは頓悟にて來るものに非ず。絶えざる祈禱と沈思と、自然との交通とに由りて次第に來る者ならざる可らず。時を以て着たる世間の衣服は時を以ての外、感情一事にて脱す可くもあらざる也。

これ吾が近來の見る所。

五日。

午前六時、床を出でぬ。午前五時が規定なれども、兎角朝は眠たきものなり。されど遂には五時曉起の習慣を養ひ得ずんば止まざる可し。夜は九時半に業を止め、われは直ちに屋外に出で去りて或は海濱に或は「あぶずり」の崖上に散歩を試むる、其のひまに細君室を清め床を敷き、禮拜の用意して待つ。散歩より歸りて直ちに禮拜をはじむ。禮拜は、朝は讃美歌一編を高唱し聖書一章を朗讀して其の中より簡單なる感話をなし而して後祈禱し、以て會を閉づ。夜は、讃美歌一編を歌ひ祈禱して止む。これ毎朝毎夜の例なり。

われ思ふ。自然は愛する者に負かずとは眞理なり。其の意味は深し。自然は之を弄する者に其の

靈光を示さず、とは此の語に對する反語となすを得ん。世人は弄するを以て愛するとなす。弄して而して自然よりの感化を得たりとなす。われは所謂其の感化なるものに疑なき能はざるなり。何者を愛するにも愛は多少の忍耐を要す。愛とは吾が靈の働きなり。然るに人は肉的感情に支配せられ易し、故に眞に愛せんと思はば、此の肉的感情に克たざる可らず。これ愛は多少の忍耐を要すと云ふ所以なり。世人所謂自然を愛するもの、肉的感情を以て自然に對するに非ざるか。これ愛するに非ずして弄する也。自然に狎るゝなり。其の行は一種の道樂に非ずして何ぞ。自然は道樂者と神聖の交通を結ぶ事を爲すべきか。

われ之を信ずる能はず。

月を見る、寒夜水邊に立つの苦を忍ばざる可らず。深夜山路をたどる事も辭す可らず。俄然床をぬけ出でてよもすがら池をめぐる事も忍ばざる可らず。月に浮かるゝ者は月を愛する所以に非ざるなり。

かく言へばとて彼の詩人必ずしも忍耐以て自然に接したりとは言はざるなり。彼等は已に自然の愛を得たり。誰れか愛する者の前に出づるに忍ぶことをなさん。「自然は彼の女を愛するものに負かず」とは彼詩人にして始めて道破し得る妙句なるなり。未だ自然よりの愛を感じたることなき

もの決して此の言をなす能はず。而して自然を弄するもの決して自然よりの愛を得べきに非ず

自然の限りなき力、其のあふるゝ美光。これに對する、先づ嚴肅にして忍耐なるべし。

然らば、自然は自から其の靈相を示し來りて彼と宗教的交通をなすに至るべし。所謂自然の感化なるものは何ぞ。宗教的交通なくして感化なるものありとせば、そは酒精のしばらく人を惑はしたるが如きのみ。道樂者もまた此の感化を受けむ。

フランクリンは宗教的直感を有せず。常識的推理と世間的剛勇と商估的計算と市民的道德とを有する人なり。宗教的天才を以て世を清め人の血を熱することは其の能に非ず。彼は市入の大模範なり。

風雨極めて荒し。海鳴ること高し。

久しぶりに一日を怠慢に送りぬ。甚だしきひが事なり。剛氣の足らざるより致す處なり。神に祈りて悔ひ悛むべし。

一生再びなし。一日又一日、生命の眞意如何。永生を信ずるは希望の命なり。

罪の眞意如何。

舊約的に天地人生を見るべきか、新約的に見る可きか。はたカーライル的に見る可きか。ウォーズウオルス的に見る可きか、フランクリン的に見る可きか。西國立志編的に見る可きか。

兎にも角にも熱心に見よ。確信の上に立て。

人に對し事に對し、自然に對し神に對し、將に忍耐にして誠實に、剛毅にして大膽なるべし。

忍耐と勤勉と熱慮と謹愼とは、成功に達し、眞理に入り、希望を與へ、天職を完からしむ。

十七日。

日々勞苦して何をか求むるぞ。求むる處なし。ただ生の意を行はんためのみ。生の意とは何ぞや、動作なり。

已に時間に限られて死の影に懼れず、何ぞ時間に逐はれて齷齪を事とせむ。

野心權勢利慾爭奪の横行するを見て、老成人の畢竟何の敬重すべきかを疑ふ。

希くは理想に生きん。

理想を行ふことを務めん。恐れず、倦まず、躊躇せずして進まん。

將來を夢み光榮を追はずして、日々の職分に忠なるものは幸なる哉。

羅馬書第九章に示す神に對する信仰は實に余が心を動かしぬ。吾人は神の全能全智を信ず。己に

信するからには其の他を言はずして可なり。われ此の信仰に由つて強く、高く、また安し。疾痛、困厄は肉の上に落ち來りし地上の蔭影に過ぎず。

吾が方針はこれなり。更らに信仰の火を求む。

日々を勞作して送る。

時間に平安を求めずして信仰に慰安を悟る。自然を熱愛して其の生命と交通を求む也。

文學者たり。政治家たり。かゝる差別は斷じてわれの關する處に非ず。書を著はすの必要と用意とあれば筆を執る。起つて行はんと欲すれば行ふ。說教の必要を信ぜは說教す。

企てし事は成功を期し、成功せざる事を恥とす。但し褒貶は關心せず。

二十日。

德富猪一郎氏昨夜養神亭に來り投じぬ。

「御來談如何」と。即ち出掛く。九時まで話して歸る。

人見の文章はあかぬけがしない。

山路は日本有數の文章家。

余は智識上の訓練より寧ろ德育上の訓練を受けたり。家に在りては儒、外に在りては耶、而して

世に出でては維新以來の有志家精神。
余は病にも厭力を加へんと欲す。
回顧せず、將來のみなり。
他人の精力盡きんとする頃余の精力加はる。
昨夜氏の口より出でたる言語にして憶記する處は大凡右の如くなり。

二十四日。
野心は人心を壓迫して窮窟なる世界に入らしむ。
信仰は人心を放ちて自由を希望と滿足と勇氣とに置く。

二十八日。
少年傳記叢書第一卷フランクリン少壯の時代を脱稿したり。
凡ての最初は此の身を天地の間に見出すに在り。說教、教育の最初は人をして此の身を天地間に見出さしむるに在り。

人をして傳說、習慣、地上の衣を脱せしむるに在り。
善をなせよと言はず、寧ろ吾が生命其の物は實に不可思議極まるものなりと說くべし。

三十一日。
本年は今夜限りとなりぬ。
何の感慨も起らず。また、强いて起こさんともせざるなり。
父母の膝下に新年を迎へざるを多少の憾みとなす。
佐々城父母と未だ和親する能はざるを多少の憾みとなす。
其の他に於て不平もなく遺憾もなし。
明日は二十六歲なり。二十六歲何かあらむ。日又日、勉勵精苦耐久の外、何事も知らず。
命に安んずるの道、一日を一日となして滿足するに在り。
去年の今夜大連灣に在り。
回顧するに、今年何事をか爲したる。
戀愛を成就したり。殖地の志を失ひたり。

信仰に於て僅少の進歩も無し。
過去をして過去を葬らしめよ。

二十九年の企圖

少年傳記叢書を完成す。
倶樂部を組織す。
獨逸語を學ぶ。
漢文を學ぶ。四書。五經。
佐々木城と和解す。
交際を廣うし且つ厚うす。
日曜日は「號外」のために用ゆ。
汽車中に於ては漢文を讀む。
勉強して自然との親交をはかる。
以上を以て二十八年を送る。二十八年去れ！

明治二十九年一月

三日。

一日は池田、今井、宮崎の三氏來訪せらる。池田氏宮崎氏は二日に去りたり。
本日午後三時、今井氏及び妻と共に鎌倉に遊び八時過ぎて歸宅す。
竹越君民友社を退きたり。

竹越君には忠告書を送るべし。

倶樂部の事、池田、今井、宮崎の三氏に談じたり。悉く贊成なり。

倶樂部の事に就ては深く自から經營の勞をとらざる可らざるなり。
今井、池田、富永の三氏には別々に書を送るべし。

尤も智識ある道、尤も冷靜なる道をとりて進め。情に驅らるゝ勿れ。誠忠實意熱心を以て人と計れ。忍耐勉力恒久を以て事に從へ。

四日。

今日は愚かに送りぬ。　（結果）五日認む

明日の事を左に。

午前六時に起くべし。……（不）（六時半に起）

直ちに付越氏に書狀を認む事。……（成就）

朝めしの事。……（同）

禮拜の事。……（同）

今井君を送る事。……（同）

新聞、雜誌。……（同）

午後。

多分雜誌。……（同）

プルターク。……（不）

夕めし。

「フランクリンの父母」を書く。……（不）

ジヤーマンコース。……（不）

十時業をやめて禮拜。

就眠。

五日。

今日は國民の友掲載の小說を讀みて遂に定課をふまざりき。

明日の定業。

午前六時起。

東、三好に狀書を出す。

朝めし。

禮拜。

プルターク。

晝めし。

プルターク。
夕めし。
フランクリンの父母。
ジャーマンコース。
十時禮拜。就眠。

七日。

時は空々の中に去りゆくなり。

不思議なる世界、不思議なる生命、不思議なる人間の世。

習慣と煩惱とは吾をして此の不思議を忘れしむ。されど何者も吾をして此の不思議を不思議と思はざるに至らしむる能はざる也。

凡ての最初は此の不思議を極感するに在り。

八日。

豈にわれを沮むのアルプスあらんや。（ナポレオン）

「不能」の字を字典より引き去れ（同）

爾自身の思想を信ずること、爾の中心に於て眞理と思ふことは凡ての人にも眞理なることなりと信ずること、これ則ち天才なり。（エマルソン）

人はかれ自心の星なり。（エマルソン）

教育の眞の目的は人をして不思議なる天地の間に自身を見出ださしむるものならざる可らず。

詩人の眞の福音は人を導きて天地不可思議のうちに投入するにあり。

宗教は、此の不思議を直感したる人が瞑想苦悶して遂に一個光明と信ずるものを見出し、由つて吐き出したる言行より起りしものなり。

習慣と名目と煩惱とは此の不思議の敵なり。

此の不思議中に在りて始めて人生其の者の神秘なるを感じ得るなり。普通の知識は此の不思議の敵なり。

此の不思議を感じたる時は、普通の知識忽ち其の價値を失ふ。ファウスト最初の言を見よ。

カーライルの英雄崇拜論及びサルトンの類は此の不思議を直感せしむるものなり。

所謂る宗教家の信仰なるものゝ殆んど死灰に等しきは此の不思議を直感せず、自己を天地の間に見出さずして世の中に見出せばなり。

十二日。

名利競爭の世界は免れ得べし。されど此の天地の外に逸脫し得べきに非ず。煩惱は人心最密の衣服なり。此の衣服を着する以上は決して亦此の天地間に裸體にして立つ能はず。

十五日。

過ぐる十二日には神武寺(沼間村にあり)に登山す。此の神武寺は其の眺望を以て名あり。三浦半島の西側の海を望み得るなり。相模灣は却て遠く、東京灣の水却て近し。巖頭に座して遠望したる時の光景は今尙ほ目にあふる。細君同道なり。

神武寺にて晝飯の馳走になりたり。

昨日より時間表を改正して左の如く定む。

午前五時起　聖會。

〃六時　獨乙語(一時間)

〃七時　食事、雜務、運動(一時眠)

〃十一時　業務(四時間)

午後〃一時　食事、雜務、運動(二時間)

〃五時　業務(四時間)

〃七時　食事、雜務、運動(二時間)

〃九時　業雜(二時間)

〃十時　漢書、聖會

〃明朝五時　睡眠。

右の中「雜務」とは書狀を認むる事、新聞雜誌を讀む事、欺かざるの記を書くこと、文章を作ること、其他の事柄なり。「業務」とは著作なり。聖會とは讃美歌、讀經、祈禱なり。

二十三日。

地上の煩惱は潮の如くに吾が靈を襲ひ來る！

野心より嫉妬に、煩惱より不信に。

吾は次第に墮落しつゝあるか覺ゆ。

起つて不信より醒めよ。神の世界を觀よ。
大なる希望に入れよ。宇宙の不思議を感ぜよ。
幻は飛び去り、飛び來る。
忽ち神使の裾を踏んで、白雲の光に入り、忽ち毒蛇の穴をくぐりて、魔界の池に沈む。
天地初發の光よ、記錄の濁りたる雲を破れ。吾が靈を直射して直ちに世の衣を脫がしめよ。
吾を導きて、天の林に連れゆけ。

二十四日。

幻影あり。
我を導く一個の星あり。我が眼前に淡青色の光を發して進む。我其後を尾してゆく。
己に我の住む地球は星の如く小さくなれり。
空明遙かに他の群星と共に輝くを見る。
而して我眼を飜して四方上下左右前後八方を見渡すに、一道の光輝紫色を帶びて一方に橫はるを見る。思ふに太陽の光、暗黑に入りて其の光を失ひしならむ。矢の如く走りゆく光あり。頭上に五個の月の大さ程の圓球あり。皆淡紅色を帶びて浮ぶが如く懸れり。

余は斯かる幻影を追ふことを好む。

過去に朋友の死あり。將來に吾の死あり。吾が生は死の間にはさまる。

一日の事、記するに足るものなし。
本日「フラングリン少壯時代」製本の上到着す。吾が文字一部の書となりたるは是れが始めてなり。
吉見、布浦、中山、萱場、高岡、札幌每日新聞の阿部宇之助氏等に贈呈す。
ケトーも近々脫稿すべし。

二月

五日　朝。
一日、歸京、三日歸逗。四日空費。五日は今日なり。今は朝なり。
何事をも願はず、自由の靈、獨立の靈。確信の靈たらむことを願ふ。世の煩惱われを苦しめて止

まざる也。自然よ。來りてわれを自由になせ。相模灣を隔てゝ望む、伊豆連山の晴雪！　嗚呼われ自然を愛す。

十二日。

詩人と豫言者の自由と平和と高潔とをわれ希ふ。茅屋の民を想ふ。山林の一生を想ふ。

信子は滿腹の愛と信とをわれにさゝげつゝあり。われ已に生活の煩累を感ぜざる也。

信子はわれをして生活の煩累より自由ならしめんことを期しつゝあり。饑餓だに避くる處に非ず。況んや區々の貧窮をや。

自然兒は飽くまで自然兒たれよ。

詩人に必要の資格は、眞誠（シンセリティ）、信仰、觀察、文章の四つなり。

先達植村正久氏を訪ひヒービー、ブラウンの談話を聞きたり。

十三日。

今朝　降雪あり。

今日吉田松陰傳を讀み了る。

兩三日前、新渡戸稻造氏より來狀あり。

植村正久氏より「ガリラヤの福音」"The Galilean Gospel" by Bruce を送らる。先達歸京訪問の節借與の約束ありたるものなり。（四五日前）

此の頃先達立てたる規則を實行せず。

カーライルは吾をして天地及人生の不思議を直感せしめ、吾の「シンセリティ」を活動せしめたり。ウォーズウオルスは吾をして自然の生命を直感せしめたり。基督教は吾をして神の愛を知らしめたり。されど今や是等の直感的信念情熱、殆んど冷却せんとはするなり。

功名富貴の念、あへて吾を動かすに非ず。ただ夫れ漠々空々冷々然として信念の火を感ぜざるなり。

人の世に最も缺乏する處のものは、一個題目的の眞理にあらず、これが實行にあらず。ただ、天地と人生と通じて被ふ處の神秘に對する眞誠なる靈魂なり。言葉を換へて言へば、シンセリティ

なる靈魂の活動なり。

十四日。

爾は何を望み、何を期し、何を希ふぞ。名か、利か、逸樂か、文學者の名譽か、政治家の大功業か、宗教家の大傳道か、農夫樵夫の自由なる生活か。

何か何か明言せよ、明答せよ。爾の胸間の有りのまゝの苦悶を吐け。吐け。

嗚呼吾が願ふ所は凡て是等の者に非ず。

たゞ此の生命存在を此の不思議なる天地の間に見出す父の自然兒たらんことなり。

ア、如何にすれば吾が願を達し得るか。

如何なる手段かありて吾をして此の大希望を達せしむるぞ。吾は此の願望を達する能はざる限り決して自由を感ずる能はざるなり。囚奴なり。死灰なり。苦悶の器なり。

さきには吾信仰を希ひき。今は然らざるなり。信仰に非ず。吾が願ふ所は信仰に非ず。直ちに吾が眼を以て此の天地の兒たらむことなり。星と物語らむことなり。月と物語らむことなり。古を今見んことなり。將來を今見んことなり。死を直視せんことなり。死の呼吸を見んことなり。天

地の叫びを聽かんことなり。而して生命の大本を直視せんことなり。

問題は事實より起る。事實をはなれて何の問題か人間界に起らむ。事實なり。人間を動かさんものは事實なり。爾は見て朝鮮の大變動を大事實となし、苦心し推斷し、考案す。されど若し、大事實を求めん、然り、人生の大事實を求めんか、死と言ふこと、此の地球も何時か亡ぶると言ふこと、天地は時間に於ても、空間に於ても無限なりといふこと、一個の人の生命は極めて短かしと言ふこと、これ等は爾を動かす大々事實には非ざるか。若しあらずと言はゞ則ち爾に何の理由あるか。曰くあり、爾の知りて高言し得る理由と、知らざる理由とあり。

第一は、大事實には相違なきも、思ふて益なければなりと言ふこと。

第二は、爾、實に是等の事實を見て觀る能はざるなり。

十六日。

本日午前散歩。小坪山道に登りて甲州地方遠山の晴雪を望みぬ。午後鎌倉に散歩、薄暮歸宅。小貫小機關士來遊。

二十日。

終日降雪。されど積んですに至らず。

規則を改正す。

「吾が願」を記しはじむ。

二十五日。

一昨、二十三日の夕暮、落日を望んで自然の美に打たる。

二十七日。

松陰文九分九厘脱稿。

本日北海道高岡氏よりアブラハム・リンコルンの傳到來。氏特に學校の書籍室より借用して送りくれたるなり。

伊豆相模、峯の白雪ふかけれど
わがすむ庵は春雨の音

春雨蕭々、閑居の思ひ長し。

三月

三月七日夜記。

二月二十九日午後〇時過ぎ收二東京より來る。池田米男氏其の夜來る。

三月一日、午前横須賀に行き八重山艦の小貫一良氏(小機關士)を訪ふ。收二池田同道。鎭遠號見物。久しぶりにて仙頭大尉に遇ふ。

小貫氏と共に船渠内の露艦アドミラル・ナヒモフを見物す。

三月二日一番汽車にて收二、池田去る。見送る。歸路鶯をきく。

三月四日吉田松陰文を脱稿送付す。五日空費す。六日リンコルン傳を書きはじむ。

今日東京より松陰原稿回る。更らに文章に圈點を附し又批評を加ふるためなり。

何事にも誠を第一となす可きの工夫次第に明かになりたり。誠とは私意、私情、私念に勝ち、靜かに良心の力を張る事なり。誠ならずんば自然にも近づく能はず。眞理をも見る可らず。神を拜す可からず。ことを爲す可らず。人を服し難し。安心を得ず。滿足を得ず。氣力を得ず。

今日松陰文の原稿廻送し來りし時、余は其の面倒を思ふて澁面せざるを得ざりき。されど直ちに思ひ返して思へらく、否な々々、これ松陰のため、少年のためなり。これ計りの面倒何かあらむと。かくして快よく再び此の原稿に對するを得たり。

誠なる哉。誠なれば神必ず吾を自然兒たらしむ。誠は煩惱と兩立せざればなり。

誠は積まざる可からず。情意を誠にして眞理と人情を求めよ。

十三日。

十一日よりリンコルン傳を書きはじむ。

左の所感を記し置く。

研究すべきものは人と自然なり。

人を研究するとは、例へばカーライルといふ人は如何に育ち、如何に學び、如何に生活し、而して如何なる感情直覺を以て此の天地人生に對したるか。而して如何なる結論を下したるか。此の人の性質は如何、感情は如何等なり。此の如き研究法にて今日まで世に出でたる宗教の人、詩歌の人、文學の人、政治の人或は時に商業の人、而して哲學科學等の學問の人等を研究することなり。ルーソーを研究したらば如何に發明する處あるべき。バアンスを研究したらば如何に發明する處あるべき。

カーライルはクロンウエルを研究せり。彼れが此の研究に依り發明したる處は大なる眞理なり。

曰く何々。

聖書を研究する事はイエスを研究することなり。またボーロを研究することなり。

此の如き研究を、人を研究すといふ。余は人の大なる部分、光の部分を見んことを希ふなり。

小說家の研究とは自から異なる。

さて自然の研究とは如何。

近世の科學者が實行しつゝある處なり。

余は研究と云ふ程にあらねどフランクリンの傳を草し、今又リンコルンの詩を草しつゝあるが故に、此の二に就き發明する處少からざるなり。其の一を左に記す。

私生活と公生涯との關係なり。此の關係を見るにフランクリンの爲したることゝ、其の性情とは大に敎ふる處あるなり。公生涯と私生活とはコンモンセンスに非ずんば調和せず。野心深くては調和せず。誠實ならでは調和せず。私生涯に於て獨立の人、公衆の前に於て信用の人、乃ち始め

て大なる調和なり。

其の他此問題に關しては追々發明する處あるべし。

嘗て德富君が余に對ひ語りし事を今なほ記憶す。曰く「余は極めて幼少の頃より人生の問題を考へはじめ、而して十八歳頃まで熱心に考へたれども、到底わかるものに非ずと知りたるがゆゑに放棄したり」と。余は思ふ。放棄し得べきは人生に就き未だ何も考へざるが故なりと。一言にして云へば渠は自然の兒ならぬが故なりと。これには大に論あり。論に非ず說明なり。

道はしばらくも離るべからず、離るべきは道に非ざる也といふ語あり。恰度此の語の如し。人生其れ自身不可思議なり。故に人は此の不可思議を痛感すべき筈なり。而してこれを痛感せずして尙ほ人生の事を考へるといふ。これ考へざるを得ずして考ふるに非ずんば其の考究や忽ち止め得るの考究なり。止め得るの考究は考究に非ざる也と。

たとへば玆に人あり、捕へられて一室の暗黑中に投ぜらる。かれ頻りにさぐりて出口を求む。玆に人あり、自己の天地の間に介立するを感ずることあだかも暗室內に投ぜられし人が、其の暗黑と室內とを感ずるが如く痛切なり。故にかれは出口を求むること彼の人の出口を求むるが如し。

此の如きを人生の事を考ふるといふなり。

天地人生は不思議なり。されど人若し其の不思議を忘却し放棄し得べくんば、彼は不思議のときなりき故に非ずして不思議を不思議と感ぜぬなり。

十九日。

昨夕、獨ニ步海濱ニ、新月加ニ光輝ニ時、寂寞被ニ四方ニ、寂寞到而天地醒、天地醒覺時、吾心魂戰、於レ是漫行一時、仰ニ燦爛星光ニ、思ニ悠々無窮ニ。

平野大郊の中央に立ちて、而かも行くべきを知らず、徒らに一彷徨するものあり。嶮岨前程を塞ぎ暗雲四野に垂るゝも、尙ほ行路坦々、大道前に通ずるが如き有樣にて進むものあり。アバラハム・リンコルンの如きは後者の人か。

二十三日。

寒雨蕭々、嚴寒の時節の如し。

四　月

七日。

東京隼町の父母の膝下に在り。

逗子へは「さらば」を告げぬ。逗子にゆきたるは昨年十一月十九日にして、去りたるは本年三月二十八日なり。明記し置く。

四月一日、潮田ちせ姉の宅にて豐壽夫人と和解の面會を遂げたり。互の感情氷解せり。

逗子を去る事に決したるは全く父の病氣のためなり。父已に快方に向ひぬ。

四日の日より余發熱す。終日氷もて冷やし服藥す。五日に至り熱去り、六日に至り殆んど全快し、本日は平常に服したるが如し。

八日。

昔日の高潔なる感情何處にかある。

吾は次第に卑屈に成りつゝあるなり。

吾が苦悶は肉の苦悶に非ずや。

此の頃の此の身ほど下品なるは非ずと感ず。

天上の星、其の光なく、樹梢の星、其の色なし。

光なきに非ず、色なきに非ず。

吾が心痲痺したるなり。心眼閉ぢたるなり。

愛情と同情とを求むる勿れ。愛情と同情とを與へよ。愛し且つ敬せよ。愛せられ且つ崇まれんことを求むる勿れ。

神は吾を此の怪奇なる境に置き給ふ。神は今大なる練達を吾に加へ給ふ。これ確實なり。

神の法律ほど確なるは非ず。偏狹の心、頑固の心、卑劣の心に報ゆるには必ず地獄的苦悶を以てし給ふなるを知りぬ。

暗黑界！余が住む目下の世界は確に一種の暗黑界なり。されど音響なき波濤なき暗黑界には非ず。沈靜無風の暗黑界にてはなきなり。

天の一方破れて光明こゝに投ぜんか、如何に崇高壯麗偉大の光景を呈すべきぞ。

三月三十日の夜、潮田チセ姉、佐々城愛子を伴ひて來宅す。愛子は信子の妹なり。

ちせ姉の曰く、信子獨りを伴ひて今夜ひそかに釧店に歸りたしと。釧店には佐々城豐壽夫人あり。

余此の事を謝絶す。其の主旨に曰く、信子一人の面會は不可なり。二人ならざる可からず。

潮田姉去りて後、余信子をなじる。信子大聲を放つて泣く。

「泣く。」これ今日に至るまで引續く余が苦悶の原因となりぬ。

凡てを天父の指導を任かす能はざるよりして苦悶愈々甚だし。

四日。

一昨日信子の失踪以來、吾が苦悶痛心殆んど絶頂に達せり。信子失踪行衛未だ知れず。爲めに我が苦痛我が筆の盡し得る所に非ず。

余が肉體の健康の保有が不思議なる位なり。

一昨夜、昨夜共に僅少の時間を眠り得しのみ。

今は詳細の事實を記する能はず。

以上は今日午後五時頃潮田より歸宅しての記なり。今は午後九時四十分なり。吾が心ほとんど平靜にふくしぬ。

今井忠治君薄暮來宅。わが心は眞友、十年來の眞友に依りて其の健康を恢復し得たり。

吾が決心は左の如し。

今日の難局に當るには、ただ一路あり。曰く、尤も正直眞實にして人情と道理とに適合するの道を踏むことなり。

如何にしてか。

信子の心願をよろこんで許可すること。

故に一應歸宅して公然吾家を出づること。

以て前途の熟談をとぐること。

相手に對するに常に相手を立つる心得あること。

悲しき事實。

といふ題の下に、一昨、日曜日の事より今日までに至る三日間の事實の悲しき行錄を詳細に留め

置かんとぞ思ふ。

一昨、十二日は安息日なりき。余逗子より歸りて已に此の日まで十數日となれども、會堂に赴きたるは此の安息日が始めてなり。

午前八時頃信子を促して、收二もろとも三人にて家を出でたり。あへて促してと言ふ。蓋し信子は自から進んで教會堂に出づるの樣子なかりしなり。

朝食の時、食卓の彼方に座する信子に對つて余の曰く、「信子今日教會に赴くや」と。信子少しく笑みを含んで曰く「赴きても可なり」。

余直ちに曰く「可なり所か、應に赴かざる可からず」と。

斯くて信子は衣裝を更むる爲めやゝひまどりぬ。綿入一枚を着し、羽織は余これをすゝめたれど着ざりき。片手にふろしき包を抱き、片手に蝙蝠傘を持ちたり。包みの中には余と信子との聖書一冊づゝ及讃美歌一册なり。其の外に何もあらず。

三人は先づ招魂社の櫻を見物したり。それよりして教會に出でたり。落花の光景、此の時彼の女の心に如何に映じけむ。

余にはただ美はしくのみ見えたり。彼の女の多感にして、是等の感情少しも後の書狀に見えざるぞ不思議なる。彼の女は吾等の後へにのみ從ひて來り、今よりして想へば、言葉數極めて少なかりき。

會堂にては彼の女は女席の最も後ろのベンチに倚り、余は男席の前の方なる所の座を占めぬ。故に彼の女が如何なる形容を植村君の説教中にもらしたるか少しも知るに由なかりき。

十五日。

吾今机に向つてリンコルン傳を草しつゝあり。(夜七時)、されど吾が心の底に鉛の如き悲痛の沈みて轉ずるを感ずるなり。愛し愛する信子已に吾が家にあらざるなり。彼の女の笑聲已に吾が家にひゞかず。彼の女今何處にある。府下か仙臺か。吾等夫婦の行く末は如何。

ただ此の際、男らしかれ。忍耐せよ。凡て愛を以てせよ。怒るなかれ。

悲しき事實(つづき)

植村師の説教はクリストの人物考なりき。クリストが人寰を脱して神に祈り、神と交はりし事、大罪人を喜んで容れし事、等なり。

説教了はり、會衆散ぜんとして、余もまた出口に立ち出でたり。信子の來るを待ちぬ。

信子出で來らず。余は婦人席の入口に首さし出して信子を呼びぬ。信子出で來りつ。余に聖書の

包を渡して曰く、

「只今明治女學校の生徒に會ひぬ。これより直ちに同道して寄宿舍に到り星良子孃に會ひ彼の女を吾が家に連れ歸らばやと思ふ」と。

余何心なく曰へり。「最早晝飯なり。早く歸り給へ」と。信子曰く「直ちに歸らむ」と。余此に於て外に出で信子復内に入れり。余は全く無心なりしが、此の時の信子の心中果して如何なりけむ。熱湯を呑むほどの苦痛ありしならむ。

余收二と共に家に歸り、晝飯を了りて再び教會に到りぬ。これ青年會に出席したるなり。

青年會散じて歸路富永氏の宅に同道し、午後四時過ぎ家に歸りぬ。

信子あらず。余は一種異樣の感ありたり。

何故にかくは遲きぞと。此の時已に夕食の用意出來居たれども余餘りに氣にかゝれば、父母に言はずして直ちに外出し、明治女學校の寄宿舍さしていそぎたり。寄宿舍は中六番町二十二番地に在り。路に星良子孃に出會ひぬ。余驚き問ふて曰く「信子今日御身を訪ひし筈なるが如何」と。良子孃顏色を變じて曰く、「不思議なる哉、今日先刻來訪ありしも直ちに歸り給ひぬ、顏色甚だ惡かりき。」と。此の答を聞きし余の驚愕如何ぞ。余の聲ふるひ、余の心波の如くに激しぬ。「こは不思

議なり。まだ歸宅せず」と言ひ捨てゝ直ちに良子孃と分れ、家に歸りたり。信子依然在らず。

余は激する心を抑へ食事に對ひぬ。されど一口も喉に下らざるなり。今日は富永氏の宅にて菓子を大食したればてふ口實にて卓を離れ、直ちに家を出でぬ。此の時暮色已に蒼然たり。余は半藏門のあたりをうろつきぬ。若しや信子日本橋石町の親戚なる丹野氏を訪ひて已に歸路に就きつゝありもやせんと思ひしが故なり。

されど遂に耐ふる能はず、直ちに家に歸りて、信子の歸宅のあまり遲き不思議を父母に語り出でたり。

試みに丹野氏を訪ふて見る事に決心し、釘店に到りて先づ丹野氏の石町の番地を聞き、丹野氏に訪ね到りて信子のことをきゝたれど、「知らず」との答へに、一段の驚異を增し、歸宅したり。信子或は潮田氏よりなりとも歸宅しあらむかと空だのみを樂みつゝ。

されど信子依然家に歸り居らざるなり。已に夜は初更を過ぎんとす。遂に潮田氏に向けて電報を發し信子の在否を問ひたり。此の時已に九時なり。十時返電あり。「コナイドヲシタ」と。玆に於てか余は殆んど絶望に泣き出ださんとせり。形容し難き恐怖の念全身の熱血を凍らしむるが如し。

余主張して曰く、信子必ず染井の墓地に到りたる也と。蓋し余が染井の墓地に思を馳するは原因

あるなり。信子嘗て三浦氏の宅に在りし時にも獨身飄然染井の墓地なる亡弟の墳墓を訪ねたる事あり。而して其の後しば〳〵曰く、染井の墓地に至れば精神寂然として極めて心地よしと。

然るに此の日の說教の中、「時に人を離れて獨り神と交はる事をせざる可らず」との意あり。余こゝに於て信子必ず復もや染井の墓地に安息日の半日を送らむと志さしたるならんと思ひ、かたく斯く信じたり。されど如何にまてども歸宅せざるなり。余の疑惑は遂に空しく信子を待つに忍びず。芝區なる潮田チセ氏に車を馳せつけ、事の次第を語りぬ。潮田氏また愕然たり。されど余が憂の十分一だも解せざりし。

「兎も角も左程狼狽せずとも」と稱し、且つ曰く「或は最早や歸宅し居るやも知れず、されば速にかへり見られよ」と。余もまた萬が一を思ひて急に潮田氏を去り歸路につきぬ。車上の感とても言語のつくし得る所に非ず。

信子今頃は染井の墓地に卒倒し居らざるかなど考へ至る時は血の凍るが如くに感じ、氣も狂はんばかりなりき。然るに此の夜は天曇りて北風吹き近來に稀なるさむさを覺えければ、余が心ほとんど暗夜をたどるが如く、未だ嘗てかくまでに天地の悲哀を感じたる事なかりき。

歸宅せしと雖も信子あらざるなり。時に已に十二時。

昨夜まで枕を並べて寢ねし床に獨り悲痛の心をいだき横はる時の吾が感を如何で說明し得ん。疲勞のため眠忽ち到り、夢現のうちに二時に至りて睡氣散じ悲痛憂懼交々起り、窓外の車聲と足音とを一々耳傾けて聞く時の吾が胸の苦しさ。忽ち車聲彼方に起るよと思へば、空しく吾が家の前を過ぎて、再び彼方に沒したるなり。女の足音にまがひなき音は吾を弄するが如くにして吾が家の前を過ぎ去るなり。斯くて三時をきゝ四時をきゝ、精神疲れ果てゝとろりとまどろみしと思へば五時なりき。此に於て吾が家を出でゝ染井の墓地指して搜索に赴きたり。收二は僅に一椀餘りの飯を食ひ得と雖も、余の腹中には憂懼の冷塊みちく〳〵たれば、茶を呑み得しのみなりき。花時に稀れなる曇天の冷氣身に泌み、天地暗憺の光景も余が心中の憂懼も、殆んど余をして堪ふ可からざる思あらしめしも、幸ひに弟の同伴ありしため、談話、慰藉、氣をまぎらすを得たり。

飯田町の電信局にて潮田氏に宛て「信子まだ歸らず」との電報を發し、水道橋の傍にて車に乘り、未だ見しことなき染井の墓地に至りぬ。墓守りの家にて訪ねたれども、昨日左樣なる年若かの婦人の一人參られしを見ず、と。敎へられて佐々城進(信子の弟)の墓に到り見しに、落花點々たるのみ、人の詣でし足跡だになし。況んや卒倒せる信子の死體をや。余と弟とは兎も角も多少の安心を得たり。

再び墓守りの家に入りて彼是れと尋ねきゝたれど卒倒したる女子の噂あることなし。則ち墓地を辭して徒歩歸宅の路につきぬ。

途に交番所に至り、失踪者捜索の方法等を巡査にきゝただしなどせり。歸路收二と共に萬一を僥倖せんとしたるは余等が不在の間に信子の歸宅し在らむとてなりき。されど歸宅し見れば信子の影だに在ざるなり。但し思ひきや、書狀到着し居らんとは、余の此の時の驚きと喜びと不思議の念と、今はすでに思ひ起すことすら能はざるなり。

已に書狀あり、信子の死せざるを知り得たり。これ第一の喜びなりき。此の書狀は此の記の終りに書き寫すべし。今は其の大意を記さんに、

「外側より余を助くる方、余の利益となる」。

「信ずる方法に進まん。」

「されど許可を得んと欲すれば余の許さざるを知るが故に無斷にて家を出でたり。目下市外の舊友の許にあり」。

「星良子孃にも一通を出し置きぬ」。

等なり。要するに自分も勉强したく、余にも獨身者の精力を以て勉强させたしといふに在り。

此の書狀を讀み了はるや、先きの憂懼は一變して言ふ可らざる悲痛となり、餘りの事に暫時は怒氣も起りたれど、信子の悲哀を思ふて忽ち消滅し、一轉して大悲痛となりぬ。

「信子何處にゆきたる」これ第一の念なり。市外の舊友の許とは誰なるか。書狀は本鄕區の消印にして十三日のイ便なり。然らば昨夜投じたるなり。

余の疑念に曰く、此の書狀は吾が家にて認めたるものならんと。母の曰く「先日汝が圖書館に赴きたる節、信さんは頻りに何か書狀樣の者を認め居たり。」と。されど兎も角も、疑念は疑念となし置きぬ。

星良子の許には如何なる書狀や到來したるぞ。其の所在に就き多少の手がかりはなきか。こゝに於て直ちに車を飛ばして中六番町なる明治女學校の寄宿舍に赴きたり。

良子は登校中ときゝ又學校に赴きたり。

良子に逢ひて昨日來の事を語り、信子よりの書狀を示し、「御身にも到着し居る筈なり」と言へば、未だ到着せずと答へぬ。余問ふて曰く、「御身は信子に金を貸しはせざりしか」。良子答へて曰く、

「一圓貸したり」と。

抑も信子の最初吾が家を出でたる時は一文錢を持たざりし筈なりき。故に吾が家のもの悉く彼の

女の如何にして一文錢なきに失踪し得たるやを疑ひ居たるなり。今や始めて多少の疑團を解き得たり。

「然らば仙臺に行きしには非るか」

「一圓にては仙臺に行かれず」

「然らば府下にあるなり。御身に心當りなきや」「今まで信子さんとは餘り交際せざりしかば、其の交友を知らず」

毛も角も寄宿舍の方へ書狀到着し居るやも知れざればとて、余と良子とは再び寄宿舍へ歸りたり。されど未だ到着し居らざりき。余いたく失望す。已むことを得ず正午頃また來るべしと約し置きて歸りたり。

十八日。

午後〇時半此の筆を執る。

悲痛の事實、未だ書き了はらざるに、事は愈々悲痛に赴かんとす。窮極する處、一轉せざる可らず。一轉する時、通ずる處なかる可らず。事は今窮極に達せり。

昨十七日薄暮(六時十五分)、德富氏より來電あり、曰く、早く來れと。直に車にて馳せつく。

佐々城本支氏より德富氏へ左の電報到着し居たるなり。

「信子死を決す。十二日より絶食、委細潮田に聞け、賴む。」

愕然たり。德富氏と相談の上、余直ちに車を潮田に飛ばし、此の電報を示す。潮田無論何の委細も知らざるなり。再び德富に歸り、德富の名にて左の電報を發す。

「潮田に樣子聞く、少しも分らぬ。」

余も亦同時に、

「信子居所誰も知らぬ、スグ知らせ。」

佐々城本支子は石狩瀧川半開地オホイヅミ館にあり。

本支氏は如何にして斯る電報を打ちたるぞ。それにしても信子は何處にあるぞ。仙臺にあらぬ由豐壽氏よりの報知潮田氏まであり。然らば東京に在るか。然らば誰か本支氏に信子決心の由電報打ちたるか。又何故に豐壽氏、如何に病氣とは言へ、此の際歸京せざるか。

茫々として少しも知る可らず。

何の故に信子は死を決したるぞ。發狂したるか。然らば何故に發狂したるか。何故に絶食したるか。

茫々として之も知る所あらず。
本支氏よりは今だに返電なし。如何にせん。
想像も何も及ぶ所に非ず。苦悶は鉛の如く血管をころがる。
人間とは何ぞや。憂苦其の者にや。吾とは何ぞや。天地已に茫々として倚る處なきに、人はたゞ
地上に憂の器たらむとす。
嗚呼信子、信子、吾が愛足らざるか。
面白くもなき世なるかな。哀れなる人の運命。今の今、此の心に希望と生命とを吹き込み得るも
のは何ぞや。神の愛か。然り、神の全智の愛か。クリストの道か。
罪多き身なるかな。愚なるかな。
人生とは何ぞや。人生とは何ぞや。茫々紛々援々として知る可からず。人より人の迷出で、天よ
り天の光來らず。信子果して死したるか。斷じて斷じて、斷じて死なじ。
死とは何ぞや。生とは何ぞや。愛とは何ぞや。死を包む此の地の神よ。
吾が一生の命運！　何者か吾を導き、吾を誘ひ、吾を支配するぞ。人生　人生、これ何ぞや。人
の一生の命運、嗚呼これ何ぞや。

美はしき花も憂ふる心に何の力かある。今の今、此の心に希望と生命とを吹き込み得るものは何
ぞや。

午前の中に本支氏よりあるべき返電、今まで(午後二時)來らざるなり。信子何處に在るぞ「十二
日より絶食」。「死を決す」。何故に、何故に、吾と良子孃とに送りたる書狀の意は如何にしたる。
二十日。
朝七時二十分此の筆を執る。

十八日午後潮田よりの來狀に曰く、豐壽夫人歸京したれど、病氣の爲め、兩三日は面會相談致し
難しと。余此の事を以て理と情に於て不法となし、直ちに德富氏を訪ひ事の次第を語り、潮田を
訪ふ。不在。釘店の佐々城を訪ふ。良子孃あり。豐壽氏に面談の事を申込む。潮田の宅ならば會
はんといふ。乃ち潮田に到り、電報を以て豐壽夫人を呼び寄す。豐壽夫人來る。のぶ子浦島病院
に在ること明白となる。
歸宅す。今井君在り。信子より來狀あり。曰く離婚(表面だけ)致し度し。其方其の爲になると。

直ちに浦島を訪ふ、一二時間の押問答の末、遂に面會す。信子病床にあり！
信子の曰く、かの願を叶へ給へと。余の曰く、情なきことを言ふものかなと。左右に醫士と後に看護婦とあり。何事も思ふこと語り得ずして歸宅す。
歸宅すれば午前三時。直ちに一通を認めて、昨朝投ず。
昨日午前德富氏を訪ふ。兎も角も潮田と相談致し度しとの事故、余より潮田に斯く申し遣る。
午後湖處子來宅。四時頃收二、今井氏を伴ふて歸宅。七時頃まで語りぬ。
信子より來狀あり曰く、逢ふはうれしけれど、亦更らに苦しと。

今日に當り余の決心は是なり。
信子をして其の判斷をひるがへさしむること。
信子の愛さめ、信子余にそむき去るとも。余は決して怒らず。飽くまでも彼の女を愛すること。
且信子の爲めよりすれば、今日の判斷は他日の後悔なるが故に、信子をして他日の後悔に入らしめざる樣、夫婦の義を今日に維持すること。
如何なる場合來るとも、余の口より一度、離婚の言葉を放たざること。

如何なる場合たりとも余は信子をせめざること。

決心は決心なり。悲痛は悲痛なり。信子の口より彼の言の出でしを思へば、其の理由は兎に角、
余には無限の苦痛なるなり。
男らしき精神來れ。高壯の覺悟あれ。

二十一日。

リンコルン漸く脫稿せり。
昨日星良子孃を待ちたれども來らざりき。五時より六時の間に來舍あれと申し來りしも悲痛のため、午後より床上に橫はりて、之も果さざりき。薄暮信子に一書を出し置きぬ。
夜に德磨氏來り、談話悲痛を拂ふ。尾間、大庭兩氏來る。圓座して來る二十五日開會の筈なる一番町敎會男子部懇親會の相談あり。
本日午前はリンコルンのために消す。
午後トルストイ『二代』Two Generations を讀みたり。
永田進之允氏來談あり。

星良子孃來訪す。バイロン、ウオーズウオルス、ウエルテルの悲哀、を貸す。信子の心をひるがへすことを相談す。

夜今井忠治氏來談あり。九時去る。浦島醫師に書狀を發す。

「ダンテ」をひもときはじむ。

宇宙、人生に關する偉大にして崇高なる感情の流れ胸間に潛入せり。信子の失踪以來の悲痛は余が精神に非常なる結果を來せしが如し。

人生は眞面目なり。死は恐ろしき聲なり。

二十二日。

今朝信子並びに星良子孃に書狀を發し置きぬ。

ダンテを讀む。

今や吾が心には名狀し難き一團の苦惱あり。

此の惱苦は今日まで經驗なきの苦惱なり。

信子の愛の行くへを遂ふ苦惱に非ず。否、それもあり。浮世の名利に焦がるゝ苦惱にもあらず。

否、それもあり。されど是等は其の苦しき湖水のなぎさに漂ふ雲影に過ぎず。

吾は今や此の恐ろしき天地のたゞ中に裸體のまゝ投げ入れられむとするが如し。

無窮の「時」に暗き雨降る。無限の空際に火の焰ゆる聲あり。

愛とは何ぞや、美とは何ぞや、生命とは何ぞや、死とは何ぞや。

吾に一團の苦惱あるなり。

此の苦惱は吾强いて醫せんとせず。

信子は全く利害を打算して愛の純潔を失ひたるなり。

されど愛の純眞ならざるものは吾とても然り。信子をのみとがめんや。信子もし其の心をひるがへすことなく、全く余を捨て去らば、余は其の苦痛を深く藏して此の世を進むべし。

余は「愛」を全うせん爲めには苦痛を擔ふを辭せざるべし。

利害名聞の惑聲、しきりに耳朶を打つ。屈することなく理想の天に進め。

無窮の天地！　其の間の生死！　一生！　苦樂。眞面目の事實なり。

午後信子に與へんとて左の書を作る。

熟考の上の書。

第一、御身此の度の事は全く余の事業、利害、功名等を苦慮して遂にこゝに至りたる事と信ず。されど夫婦は人倫最大の事なり。之を失ふてまでも功名を握らむとするは下劣なる空想なり。夫婦は愛によりて永劫をちぎりたるもの、功名は此の世のつかの間の夢に非ずや。

第二、吾等夫婦は結婚する迄には非常の苦心を爲したり。死をさへ決したり。勿論水火をだに辭せざりき。況んや區々の功名富貴をや。其の爲め吾等が戀愛の事は交友間知らぬものなし。九州より北海道に至るまで朋友知人の住む所、悉くこれを熟知せり。且つ德富、竹越等の諸名士を煩はして牧師の下に結婚したり。故に如何なる口實あるにもせよ、未だ一回だも眞實相衝突したることなく、戀ひこがるゝ吾等が忽ち離婚する事は吾等一生の面目にかけて出來ぬ事なり。一生の間背後の嘲笑を擔ふを如何せん。否、われ等一生の希望達したる曉、われ等の事業の後世に傳はらむ限り、吾等常に不貞、不信、淺情、薄愛の嘲りを辭する能はざらむ。如何程の理由あれば、吾等此の大恥辱を受けて甘んずべき。

第三、また假りに斯かる嘲笑的恥辱を忍び得とするも、吾等果して離婚後、心の底に何の悲痛も

なく、今後を生活し得べきか。余には能はざるなり。御身の愛の深き必ず余をして其の心に必ず無限の悲傷を負はしめて今後を送らしむるが如き無殘なる事は爲し給ふまじ。また御身の多感多情なる、必ず又無限の悲痛絶えず胸間を往來して常に幽愁の日を送り給ふに至らん。これ明白なる事實なりとす。

第四、昨年十一月十一日よりの五ヶ月間、斯くまでに相愛したる吾等、不思議にも御身をして突然こゝに至らしめたる理由は、名も利も身も心も相さゝげて打込みたる戀の香、漸く消え、此の世の利害得失、私利私慾の念、漸くきざしたる矢先に、御身の身體に病氣さへ起り、兎角心の屈し勝ちに至りしより、遂に利害の念、御身の愛と忍耐とに打勝ち、以てこゝに至らしめたる也。

第五、經驗ある人の言をきくに、新夫婦の危險は結婚後半年の間に起る。此の半年を忍耐して經過せば夫婦の眞味はじめて生ずと。成程御身は五ヶ月目に此の暗礁に乘り上げたり。有體に言へば人間は誰れしも弱點だらけなり。結婚後に至り、結婚前の空想の如くに參らぬは普通の事なり。空想の如くに參らぬとて離婚したら天下成立するの夫婦なかるべし。其處が忍耐なり、工夫なり、互の反省なり、互の奬勵なり。艱難苦樂を共にするとは外部よりの艱苦のみに非ず、互の弱點より出づる人性の惡所と戰ふにも共にせざる可からず。夫婦の眞義はこれに非ずや。故に實は吾等

夫婦もこれからが忍耐なりし也。これからが夫婦の眞味なりし也。これからが愛の愛たる處を事の實際に現はす可き筈なりし也。

第六、余は姦淫の故ならで其妻を出すことを禁ずるクリストの敎を奉ずる者なり。余は嚴肅なる宗敎上の儀式を重んずる者なり。余は植村牧師の權威を重んずる者なり。故に終生、余の口より離婚の二字を言はず、永久の妻を御身なりと確信し、神と凡ての人の前に公言することを止めざるなり。これ御身と余とが此の世に於ける神聖の義務なり。これ吾等夫婦の面目を神の前に保つ唯一の法なれば也。

以上說く所によりて最愛なる御身、必ず靜思熟考をこゝに致し給ふべし。就いては今日の策如何。

第一、益々事を面倒にして其のため佐々城、國木田兩家の父母等に此の上の苦慮をかけぬこと。

第二、あとへも先へもゆかれぬ樣に致さぬこと。

第三、事を餘り長引かして却て面白からぬ風說を傳播せしめざること。

故に御身の病、少しく快くなりたらば、單身吾が家に歸り給へ。他人を煩はすことなく無斷にて家を出でしも御身ゆゑ、また獨斷にて歸り給へ。たゞ余を信じ余にまかせ、斷然余が言に從ひ給へ。余が切なる願はこれなり。御身熟考靜思の上、必ず余の此の切願に從ひ給ふことを確信す。

再言す、最愛の妻よ、斯くまで御身にこがるゝ余の言を用ひ給へ。沈默のうちに斷然歸宅し給へ。御身の此の一擧によりて、凡ての人、悉く愁眉を開き、余の悲痛、一變して歡喜とはならむ。義と貞と愛と信とを全うするは此の一擧に在り。決して利害に誘はれ給ふな。

御身の哲夫認む

最愛永久の妻信子樣

二十三日。

苦痛忍び難し。されど忍ばざるを得ざる苦痛なるが故に、愈々苦痛なり。此の世の苦しくもあるかな。

信子、信子。われを許せ。われ實に御身を樂します能はざりき。御身のわれに注ぎし眞心のほど、しみ〴〵うれしかりしぞや。

今や御身遂にわれを絕えざる苦痛の墓に葬りて去りぬ。

これもとより余自から招きたる事なり。

今後御身如何にするとも余に歸らずんば、余には無窮の苦惱あれど、余が御身に注ぐ愛は益々深かるべし。余は一生、御身を愛すべし。

今後、信子遂に吾に歸らずんば、余は信子に關してはたれにも一言せざる可し。何事をも語らざる可し。

萬斛の愛と悲と、これを沈默の中に藏せん。

余は永久、信子を愛すと感ずることによりて一種の慰藉あるなり。

吾、浮世の浪にたゞよふ時も、依然信子を愛せん。われ死する後も信子を愛せん。これ詩的表明に非ず。余が信仰と希望はこれなり。

されど、されど神のめぐみ深きや、必ず信子の今日の第二の空想を破り給ふて余が家に復歸せしめ給ふことを信ず。これ眞に信子の幸なれば也。

信子は離婚後の空想に誘はれつゝあり。此の空想の空に歸したる時、彼の女は如何にすべき。大苦痛其の心を襲はん。彼の女は一生悲痛の子とならむ。余、悲痛の子となり、信子また悲痛の子となる。これ離婚の與ふる處なり。

嗚呼信子は悲哀の子なる哉。

信子、信子、來つて吾が愛に投ぜよ。浮世の夢を追ふて苦しむ勿れ。

二十四日。

余と信子とは今日限り夫婦の緣、全く絶えたり。昨日信子に遇ひぬ。信子の本意全く離婚にあることを確かめ得たり。

本日午前、德富氏を訪ふて相談の上、離婚することに決し、其の通知書を認めて德富君に手渡したり。

是に於て去年六月以後の戀愛も一夢に歸し了はんぬ。

斯くまでに相愛したる信子、遂に吾と相離るゝに至りたる事、極めて悲痛の事なれど、人の心の計り難きを思へばこれも證なし。

余は今やもとの獨身者となりたり。

德富君の曰く、發憤して布哇なり、亞米利加へなり行きては如何と。亞米利加へ行くなら百圓は出してやると。

未だ余の決心定まらず。

母は贊成し、父は多少の不同意あり。

戀愛に破れたる此の悲傷の心、如何にしていやす可き。

余が心には尙ほ微塵も彼の女を夢み恨むの念なし。否、尙ほ戀々の情に堪へず。されどこれこそは未練と申すなれ。

亞米利加行！　大なる命運の分れ目！

二十五日。

午前十時過認む。

昨日午後、收二を伴ふて小金井の櫻堤に遊ぶ。途中にて大久保に下車し、つゝじ園等を散歩す。小學校の運動會などあり。

新綠もえん許りの郊外の風光は却て吾が心に無限の感傷を加へぬ。境の停車場に下車し、昨年信子と夫婦永劫のちぎりを約したる林に到り、收二に去年の事を物語れり。信子と共に紙を布きて憩ひたる林、今は悉く伐木せられしを見る。

松柏も一年立たぬ中に變じて薪となり、夫婦永劫のちぎりも一年ならずして一片回顧の情となる。櫻堤をさかのぼりて、里餘にして歸路につきぬ。

林頭已に月色の淡きあり。浮雲變幻、日光出でゝまた沒しぬ。

歸宅せしは八時近かりき。食後直ちに植村正久氏を訪ふて離婚一條を談話す。氏夫婦共に非常の

同情を表せらる。余が今後の事に就き戒むる處めり。植村氏は北米行には先づ不同意の方なり。

余が現在の悲痛困厄につれて、過去を回顧し來れば、眞に悔恨の情に堪へざるなり。

十年の學問、何を學びたる。一個の堅固の志を立つる能はず、空々として經過せり。

一陣の寒氣、心魂に吹き入りぬ。少壯の猛氣忽然として冷却せんとす。何をなし、何をつとめん。

此の失神亡氣したる青年の活氣を再起せしむるもの何處にある。

一個の火、かすかに胸間にもえそめぬ。

「クリストの死」

余は一度死したる也。今や新生命に入りつゝあるに非ざるか。

二十七日。

午後五時認む。

二十五日の午後は一番町教會男子部の懇親會ありたり。

其の夜今井、田村、富永、尾間の四氏來宅。收二と六人、圓座して快談す。

余が北米行の可否の論、極めて盛なりき。富永、田村の兩氏は否とし、今井氏は可とせり。收二

は賛成なり。
富永氏は余にすゝむるに忍耐して今日の境遇を續く可きを以てせり。余もまたこれを思はざるには非ず。
今井君は大なる經驗を得んために、と稱して賛成す。
夜の十一時散じたり。
二十六日午前教會に出席す。植村先生の説教あり。クリスト教に就ては人々大に進んで求むる處あらざる可からざる意を説きたり。
午後富永氏の宿處にて談話す。
夜もまた教會に出席せり。雨降る。
今朝快晴。
民友社に出社し久保田米齋君に挿入畫を托す。

嗚呼信子遂に吾を去りぬ。
兩三日前、收二、德富氏を訪ひし時、德富氏潮田より聞きし處なりとて傳へて曰く、信子は逗子

に在りし時にも兩三度逃亡を企てつゝる由。德富氏は是等の事實よりして、信子を魔物と罵り、狸と稱し、寧ろ此の度の事を祝すべしと言ひ、且つかゝる女は七度も姦通する女なりと熱罵せし由。
信子果して余を欺く斯くまでに深かゝりしか。余が斯くまでに愛したる愛には何の感動もなかりしにや。然らば余を戀ひたるは始めより左程にもなかりしにや。
哈々、何等の悲痛なる話ぞや。
余は信子が斯かる心ありしを信ずる能はざる也。信子は深く余を愛し居たり。余は今も尚ほ信子を戀ひつゝある也。
二十八日。
昨夜宮崎君を訪ひ、相伴ふて月下を逍遙せり。
氏は米國行を賛成せり。氏は宗教家たらんことを余に望むと云へり。
昨夜宮崎氏と別れて歸宅して後、ヨブ記をひもときぬ。

今朝吉田庫三氏を訪ふ。氏の病未た癒えず。
出社す。

道路をゆく時、妄想より妄想に、吾が心回轉す。

「功　利、名、聞」の力、今しきりに吾が上に加はりつゝあり。

苦闘絶えざるなり。

今はわれ吾が缺點をのみ見て自棄せんとしつゝあり。

されどこれ、神のかくして人の靈を卑しむる仕方なるが故に、未だ全く自暴自棄せざる也。

大なる家、美しき馬車、高き位、派手なる衣服、斯かる人の世の誘惑の力の加はりし原因は如何。

信子を愛せし結果なり。

名と利との力、蓋しまた家庭の影響なり。

父母、われに望むに功名富貴を以てするが故なり。

此の吾を誘ふの力、今や甚だ大なり。

献身は容易の業に非ずかし。

身を献じて吾が靈を救ふことを期せよ。

神の道を求めよ。

過去の吾が生涯をして一片のざんけ錄たらしめよ。

新生更生して神の道を求めよ。

本日午前十一時頃より、老父母を伴ふて大久保つゝじ園を訪ふ。四谷驛より汽車に乘りぬ。歸宅したるは午後四時なりき。歸路清水谷の大久保紀念碑のつゝじ園に遊びぬ。

歸宅後、リンコルンの校正に着手し、晩食後直ちに出社して、夜十時(只今)歸宅したり。信子の吾が傍を去りたること、其の愛の消滅したること、是等の苦痛は今日もまた吾を非常に惱ましたり。

嗚呼此の身は無きものとは思へども、兎角は煩惱のみに苦しめらるゝ事かな。名も利も戀もわれには要なし。と言ふは欺きたる言なり。名と利と戀と、此の三者、今日此の頃ほど吾を苦しめし事は非ず。

月色皎々、天地悠々、人生夢の如し。

二十九日。

夜十一時記。

午前七時家を出でゝ神田青年會館に至り丹羽清次郎氏を訪ふ。米國桑港青年會の事に就き、聞く

處あらんためなり。丹羽氏未だ青年會にあらず。氏の宅、小石川第六天町に到る、不在。歸宅。九時、吉田友吉氏來る。全力を美文に注ぎては如何といふ。星良子孃の葉書に返書を認む。晝食後出社す。午後二時過ぎ、今井氏と共にあたごの山に登り、バラ園の躑躅を見物し、麻布永坂のそば屋に到り、山王社を散歩し、共に歸宅して終に十時過ぎまで語り、氏を送りて麴町通近傍まで到りて歸宅したり。

眞理は人性を通じて始めて生命あり。

理想は人の品性を通じて始めて現實なり。

眞理、理想は言語に非ず、題目に非ず。

故に此のわが一身一心一生一個は眞理、理想の權化たることをつとめざる可からず。

人は慾と迷の入れものに非ず。眞理と理想とを示す實體なり。此の心だにあらば自から重んじて猛省し、直立し、進行し、苦戰し、忍耐して此の身を輕處せざる也。

神の道を求めよ。

吾と信子との間の愛情の餘りに儚なかりし事を嘆ずる勿れ。人間は暗き性をもつ。人情は發達の中途に在り。宇宙は暗と光との戰なり。人類は苦惱のうちに開發す。

三十日。

吾を光と強と柔和と勇氣と忍耐と、眞理と理想との器となせ、と自から言ふ。

然り、されど、吾が信子を戀ふる心いとゞ深く、彼の女なければ此の世に倦み疲るゝ心地す。

彼の女の遂に吾を見捨てたる今日、寒風一陣、心頭に吹き入りて、めぐり轉じて吾をなやます。

吾が心、色と光とのぞみとを見ず。

信子、信子、汝と吾とは同じ東京市中の僅に里餘の地にすみ乍ら、汝の心、いかにしてかくも我より遠ざかりつゞ。

今更ら言ふもせんなし。せんなきが故に苦し。苦しきが故に此の世うしつらし。

嗚呼、戀てふものゝ苦しきかな。冷めし戀の夢を逐ふ苦み、何にかたとへん。

永久にわれ信子を愛す。吾が心に信子益々戀し。

彼の女は最早、戀の墓か。然らば吾れ其の中に埋められん。

此の世の事に思ひなやむ吾が心。

曰く、何を爲す可き。曰く、如何にして身を立てん。曰く、われは貧し。曰く、無學なり。曰く、愚者にして怠慢者なり。曰く、文學者詩人たらんか。曰く、政治家たらんか。曰く、傳導者たらんか。曰く、凡て吾が長所に非ず。曰く、われは一個狂漢、絶望者、呪はれし者なり。

思ひなやむ心の苦しさ。

永しへに此の地上に長らふるもの〻如くにもだえ苦しむ。

少壯の時は去らん。忽ち老い、忽ち死すべし。生已にはかなく、其のはかなきつかの間の生すら此くの如くに苦し。

さりとて自殺もえせず。自殺は罪と思へば死の後のおそろしきかな。生已に苦しく、死もまた恐ろし。

生は苦惱、死は恐怖、此の身は地獄の中央に立つ。火焔なき、劒鎗なき、熱湯なき、何もなき荒野の如き地獄の苦しくもあるかな。

今の苦惱を逗子に於ける愛樂に比べ來れば、われは高山の絶頂より深谷の最低に投げこまれしが如し。

されど友義！

今日に當りてせめてもの心の避難所は、友義のあたゝかき情にぞある。吾をせむるもの左の如し。

愛の破壞、貧困、無職業、自暴自棄、天地悲觀。

右の五個、此の一つだにあらば人は苦しきものを、此の五個相結んで吾を攻む。

信子の離婚は吾が愛を破りて無窮の悲痛を與へ、老父母を憂へしむる貧困は殆んど胸を塞ぐの思あらしめ、自信消え自から自己を呪ふに至りて殆んど何の希望もなく、これに加ふるに神の愛を感じ永生を感ずる能はざる無信仰は、實に此の天地を暗き世界と化せしむ。

此の五個のもの、未だ十分其の力を逞ふせずと雖も、尙ほ且つ吾を苦しむるに十二分の力あり。

されど吾、此の五個を征服せずんば止まじ。

吾あに何時までか自暴自棄するものならんや。吾あに遂に神の愛を感ぜざらんや。吾あに業なくして止まんや。吾あに貧に苦むものならんや。貧しき他の人を見て憐れめ。自家の富を顧ふものならんや。

たゞ愛、信子の愛、壞れしを如何せん。忍びて丈夫の如くに立たんのみ。

ヨブ記を讀み了はる。

午前早朝星良子孃を訪ふて事の次第を語りぬ。

孃泣く。

二十九日に送りたる吾が書狀を讀みて良子孃泣きぬる由。傍に在りし友、孃を促して九段坂下の花園に到り、孃わがためにすみれを求めて歸り、これを吾におくらんと思ひ居りし由を語りぬ。余其の好意を謝し、自ら其のすみれを携へて歸宅し、今机上に在り。

五月

一日。

昨日午前内村鑑三氏より返書あり。曰く、

貴書正に拜受、御厄難の段御同情の至りに堪へず。若し小生にして貴君を見るを得ば多くの慰めを呈するを得む。そは小生も早年の頃、貴君と同一の厄難に遭遇したればなり。ブロビデンス、ブロビデンス、神に謝し給へ。神は貴君を普通人間以上となさんとの聖意なればなり。

御渡米の事は大賛成には御座候へ共彼の地に於て少くとも三四ヶ月間に堪ふる兵糧を用意するに非ざれば如何ともする能はざる事と存じ候。日本人は今や彼の地に於て大に信用を失ひ居れば普通一樣の事にては彼の國の仁人君子も日本青年の爲に資を助くるが如き事はあらざるべしと存候。

貴君にして少くとも三百圓位の資を整へらるゝならば小生は貴君が斷然彼の地に到り、貴君の欲する學校に入る事を勸む。而して先づ教頭教師の信用を博し、然る後貴君の眞情を打開き助力を乞ふを得べし。小生は他に方法を考へ付かず。

小生渡米の模樣は拙著に於て略御承知の事と存候。實に例外の洋行、今日より思ひ見れば自身の大膽に驚き入り候。彼の地に於ける小生の友人は大半死歿し、今は商賣人二三人を餘すのみに御座候。依つて貴君を紹介するに足るべき人物は今は一人も無之候。

若し萬止むなくんば西京に來り給へ。小生今は徐々とカーライル文庫を作りつゝあり。小生の書函は貴君の爲めに開かるべし。只失望し給ふな。又別に耻とするに足らず。今や日本の社會は虚榮とゴマカシとの故を以て腐死せんとしつゝあり。如斯社會の褒貶何れも意とするに足らず。實に憐れむ可きは日本國なり。一人の誠實者の彼の女の大弱點を指示するものなく、又指

示するも之れを信ぜず、見す〳〵好望の國民は死滅に向ひつゝあり。國の爲めに泣き給へ。自身の爲めに泣き給ふな。舊約聖書何西(Hosea)を讀み君の厄難よりして我が國の運命を察し給へ。

四月二十九日

內村鑑三

國木田君

机下

此の書は余をして寧ろ奮つて渡米せんとするの念を愈々深からしめたり。余は金を得ることに沈思せり。遂に左の決心を爲したり。

少年傳記叢書を大至急完成せしむ可し。七册と號外一册と八册の收入八十圓を四ヶ月にて得べし。四ヶ月の經費を大節儉を以て六圓となすべし、或は七圓となす可し。故に五十圓の餘りを生ずべし。これ今にありては大金なり。

故に渡米は初秋九月と致さん。此の事を兎も角も德富君と相談すべし。以上の決心を父母にはかりぬ。父母同意せり。

午後出社し、リンコルンを校正し夫れより神田青年會館に抵りて丹羽清二郎氏を訪ひ北米に於ける便宜を青年會より致しくれまじきやを相談したり。

兎に角にスイフト氏に相談致しくるゝ事になりて歸宅したり。

北米の神學校に校資を以て直ちに入學し得ることを希望す。

夜一番町教會祈禱會に出席したり。

昨夜は教會に在る間も、人生凡て暗憺たるが如く思はれ、國事も何もかも希望全く絶えたる如くに感じたり。

今や生きて殆んど何の面白き事なしと思ひぬ。

昨夜もまた夢に信子を二回程見たり。信子悔いてわれに歸りたる夢を。一昨夜も信子を夢みぬ。夜々の夢に入るものは實に彼の女なり。友人父母皆な彼の女惡むべしと云ひ、彼の女欺きぬと罵れども、余は如何にするも彼の女を惡む能はざる也。彼の女が全く余を欺きたりとは思ふ能はざる也。

彼の女誤りたるのみと信じ居る也。

已に此の身は神の道を求めてこれを傳播することに捧ぐ。
大に歡喜して猛進すべき筈也。されど余は今や悲哀鬱悶の兒となりはてたるが如し。
人事の兒戯らしきを感じ、吾が國民の墮落を思ふ也。
一身の一生、遂に空の空なるかの如く感ず。
余は信子との愛を通じて永生の俤を見たり。
深き戀愛の中に永生の希望を感じたり。人性の美を見たり。人情の高を感じたり。
今や信子の愛、忽然として冷却し、吾を去りたる事に由りて、殆んど是等の事、一時の空想幻影
なりしを見る。
天地俄然として墨をぬられしが如くに思はる。人はたゞ虚榮と我慾との池に浮沈する芥に過ぎざ
るが如くに思はる。
信子若し死せんか、これ肉の死なり、愛の勝利なり。されど今や肉の勝利となり、愛の死亡とな
り了はんぬ。
肉の天地、眼にあふれ、愛の世界、消滅し去りたるが如くに感ず。
加へて吾が過ぎこし方の空しかりし事など思ふ也。

不可思議の天地、不思議の人生。

わが身、限りなき悲痛に入りしより、世間幾多の悲慘の出來事にのみ心注がれて、此の世界たゞ
苦惱憂愁のものなるが如くに感ぜられ、看る處、聞く處、何の快味もなく、何の趣味もなし。
東京てふ日本の首府、これに何の趣味ある。
さればとて田舍山水の地とても今はわれを誘ふに力なし。吾は實に人の世にあきはてたるが如し。
希望もなく、勇氣もなし。
友と雜談でもするが第一の樂なり。其の次は讀書、其の次は書狀を書くこと、其の次は此の記を
書く事。
睡眠も苦し。何となれば信子を夢みるが故なり。
されど、
丈夫らしかれ。苦惱に勝たるゝ勿れ。却て苦惱に勝て。
此の身は無きもの、神に捧げよ。いつまでも信子を愛せよ。神の愛を感ぜよ。神と共に歩めゝ神
と共に住め。神とたゞ語れ。神の世界を見よ。神の御手のわざを見よ。神の力、美、善、愛を感